
FPS少女と隻腕のナイファー

鬼の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F P S少女と隻腕のナイフア―

【Nコード】

N 3 4 0 0 X

【作者名】

鬼の子

【あらすじ】

現実^{リアル}では普通の共学に通う、あまり目立たないおとなしい女子高生^{ひかべ}。

日可部^{ひかべ} 優理^{ゆうり}

しかし、F P S界では戦火の皇女と通り名で呼ばれるほどの凄腕プレイヤーだった。

そんな凄腕プレイをしている最中、彼女に接近戦を挑む男。よりにもよって最弱のネタ武器と言われた軍刀で負けてしまった。

そのことが忘れられず執拗以上にその男を狙う彼女だったが、何度

も返り討ちに会う始末。

だが、あるとき彼女の高校に一人の片腕を失った男子生徒が転校してきて？

#00 戦場での出会い（前書き）

はじめにこれは決して身体障害者の方を差別する為のものではありません。

水木しげる大先生や剣客伊庭八郎などかつこええという人を書けたらなと思いました。

#00 戦場での出会い

「……」

一人の迷彩服の少女が森の中を伏せて、匍匐ホフクしながら沈黙し進んでいく。

少女の手にはM4A1というアサルトライフルが大事に抱えられていた。

その銃身下にはグレネードランチャーが装備され、その少女には何とも不釣り合いな大きさの銃だ。

だが、彼女にはこの銃がいたくお気に入りだった。

「カサ……」

一瞬、草を踏む物音がしたので、その場で前進を止めて息を潜む。

「ザッザザッ」

少女はその足音を聞いて、確信した。

『敵』

その敵は銃を構えたまま警戒をしながら進んでいたが、少女が草むらと同化していた為か足元にいるのを気づかずに通り返した。

『やるなら今しかない』

彼女はヌッと物音せずに立ち上がり、足音がしないよう中腰でその敵に忍び寄る。

腰に差しているサバイバルナイフを取り出し、それでもなお歩く敵の頭を捕まえ、そのまま背中にナイフを突き刺す。

敵は動かなくなり、確実に仕留め終えたあとに突き立てたナイフを抜いた。

『1人キル——あと3人』

今の敵を倒したことで仲間気づかれたかもしれない――

彼女はその場を離れ、またも草むらと同化する為にその身を伏せる。案の定、先ほどとは気配を隠さないで「ザザザッ」とうるさいぐらいの足音が聞こえた。

味方をやられた為に焦っていたこともあるが、それには余裕の意味合いもあったのだろう。

案の定、次の敵二人が接近していた。

味方だったと思われる亡骸を発見するやいなや、その辺りを探索しはじめる。

それは間違いなく少女を探していた。

少女は時を待っていた。彼らが黙々とこちらに近づくのを。

だが、あることに気づき腕時計を見る。

『作戦時間が限られているな』

少女が与えられた作戦は敵の重要小型コンテナの爆破だった。

約束された時間内までにC4というプラスチック爆弾を仕掛けなければならぬ。

ここでのんきに一人ずつ慎重に待っていたら時間はとうに過ぎてしまっただろう。

ならばと、少女は一つの危険な賭けに出ることにした。

少女は持っていたアサルトライフルのトリガーに手をかける。

そして、軽くトリガー引いた。

「バシッ」

アサルトライフルから発射された一発の弾丸は敵を反れて、明後日の方向に行く。

それに気づいたのか、二人の敵はその弾丸が撃たれた方向へと近寄

ってきた。

『そうそう、いいねいいね。バカ正直な敵は』

彼女はニヤリと気持ち悪い笑みを浮かべ、銃に装備されたグレネードランチャーに手をかけた。

「まとめて、去^イね！」

ポンツと軽い音がしたかと思うと、その1秒後には少女の目の前では爆発が起きていた。

先ほどまでいた敵二人は数mは吹っ飛び、もう息はどちらも絶えている。

少女はゾクゾクとした武者震いを抑えられずにいらなかった。

『これ、これ。この快感よ……！』

自分が想像した通りに事が運ぶことほど、うれしいものはない。

彼女はそれを幸せと実感し、残り1人となる敵の考えを想定することにした。

『今の爆発でこちらの居場所は知れた。ここで敵が倒しにこの場に来たとしたら三流。このままコンテナまで待機するのが二流ってところかしら。どちらにしても、もう勝負は決まった』

少女は確信する。今までにおいて自分と1対1というタイマンで勝ったものはいなかったからだ。

一流のソルジャーという自信は彼女を足早にさせ爆破目標である小型コンテナに急ぐ。

少女は重要コンテナに着くやいなや、まずは辺りを索敵する。敵は隠れている気配はない。

次にこちらを見回せる高台の方へと目を向ける。

だが、人影もなく。ここにやってくる様子もない。

『スナイパーもいなければ、隠れているわけでもない。それで爆破

目標を放置？　これはあとの一人は三流ってわけね』

となると、今まで出てこなかったのも頷ける。

「相手は相当の臆病野郎^{チキン}ってことか」

黙々と爆破目標にC4を仕掛けた。

ピッピッとカウント音が少女の頭に響く。爆破をするのは45秒後だ。

あとは少女自らがその場を離れて爆破が完了するまで待つが、その間に解除されればもう手持ちの爆弾は無く爆破することはできない。つまり作戦失敗だ。

「とうとう敵も出てこないってわけか。拍子抜けしたわ」

少女はタカをくくっていた。爆弾を仕掛ける時ほど隙というものは大きい。

この間に敵襲が来るとすれば、一流のソルジャーとて太刀打ちすることはできない。

だが、少女の敵は完全にその絶好のタイミングを逃したのだ。そんな敵が彼女にとって脅威のものと考えるには至らなかった。

が、少女はすぐに銃を構えることになった。

「よくもまあ、ここでのこのこと……3流どころか、ただのバカね」

少女の目の前には一人の軍服の男が立っていた。

だが、彼女は一瞬見るとその男は今までの敵と違和感を感じた。

男は銃らしきものを持たずに左腕にかつて日本軍が使ったとされる軍刀を携えていた。

そう、ただの刀だ。

少女は理解する。

この男は今のコンテナに仕掛けられている爆弾解除を諦めて、接近戦でのタイマン勝負を望んでいるんだと。

ルールを捨てて、生か死の勝負を決めようということのだろう。

だが、少女はニヤリとした。

「ここで私が銃を捨てて、野郎ぶっ殺してやらああとか言うのでしょうけど、おあいにくそういう熱い性格じゃないのよ」

少女は問答無用にアサルトライフルのトリガーを最大まで引いた。フルオートで発射される銃弾は軍服の男目掛けて飛んでいく。

「アヒヤヒヤ！ これで全キルじゃー！」

その少女の姿はさながら他から見れば悪魔のように見えた。

だが、男はその出来事に眉一つ動かさずに、横へと平行に移動する。

「避けられた！？ チッ」

アサルトライフルはマガジンの弾を全弾撃ち尽くしたのか、カタカタと銃は音を立てた。

少女は急いで、ポケットにある予備のマガジンを取り出し装着する。

男はその動きを見過ごさなかった。

マガジンが銃身から離れた瞬間に少女にいる前へと接近してきたのだ。

『これは即座にグレネードランチャーに返るべき？ いや、この距離だと自分を巻き込むか……』

自問自答をしながら少女は一瞬で次の手を考える。

『相手はこちらがリロード中の為に銃で攻撃すると考えるはず、ならその意表を突くか』

男が左腕に携えていた軍刀に右手で柄をつかんだ。

『リロード完了。だけど、撃っても1発か2発。この勢いと距離ならあの刀の攻撃は当たる』

だが、少女はこれを予期していたことだ。

そして、その前に彼女は腰に差していたサバイバルナイフを逆手で抜き取る。

「お望み通り、ナイフで勝負してやるよ！」

ナイフなら確実に致命傷のダメージを与え、敵の動きを止められると考えたからだ。

接近してきた男目掛けて、ナイフを突き刺した。

『終わった……』

彼女は確信したのもつかの間、目の前のことに目を疑った。

「あ、あれ？ 消え……」

先ほど、目の前まで来ていた男は少女の視界からは消えていた。

「……ザッ」

一瞬、ものすごい殺気だつものと同時に後方から物音がした。

そして、瞬間に振り向く――。

「えっ……？」

目の前にいたはずの男はいつの間にか少女の背中へと回り、そして長く鋭い軍刀の刃が彼女の身体に切り刻まれた。

『嘘――嘘だ……』

少女がその場を倒れると同時に爆弾のカウント音が聞こえてきた。

予測では残り20秒。

だが、そのカウント音は次第に心臓音が弱まるように音が小さくなっていき、聞こえなくなった。

——そして、少女のモニターには大きくLOSEと書かれた文字が映し出されていた。

#00 戦場での出会い（後書き）

FPSが大好き。

#01 戦火の皇女

「はあ？……はあ！？」

たくさんのかわいらしい人形が置いてある部屋の中で一人の少女がパソコンの前で叫びながら長い黒髪をくしゃくしゃにしていた。彼女の名は日可部優理^{ひかべ ゆうり}。ごく普通の共学に通い、特に目立たなく大人しいはずの女子高生はそのゲームの前では別人になる。

そのゲームの名はコマンダーオブクロス。略してコマクロ。

世界中で大人気のファーストパーソンシューティング、通称FPSのゲームだ。

何万人プレイヤーという中でも彼女の強さは異質とまで言われ、女性キャラで戦場を暴れまわるその姿から【戦火の皇女】とまで言われた。

その中で彼女が参戦したサーチ&デストロイとはチームに分かれ敵を殲滅するか、爆弾持っている者は爆破し、持っていない者は解除するというもので勝敗が決まるゲームルールだ。

このルールで彼女は今まで無敗の強さだった。

が、突然その連勝記録はストップされた。

それが普通の相手だったのなら、まだ彼女は納得していた。

だがよりにもよって

「ナイフアーとかありえんだろ！？」

ナイフアーとは文字通り、ナイフというように近接戦闘でしか使われないものをあえてずっと使い続けている輩のことだ。もちろん、これは銃という武器を持てるゲームにおいてそのハンデは重荷でしかない。

その行為はするということは勝負を捨てに来ているのがほとんどなのだ。

特に優理が許せないのは【軍刀】という武器を持っていたことだった。

軍刀とは現実世界では旧日本軍でしか使われていないものだが、実際の戦場を再現する為にこのゲームで再現された。しかし、その強さは史上最大のネタ武器と言われ、これを装備すれば普段のナイフよりリーチが長い攻撃が可能となる。だが、最初はそれでは強すぎるんではないかということ弱体化が重ねられ、申し訳程度のリーチ差と攻撃するまでの挙動が普段のナイフより遅くなるという仕様で最弱武器となった。しかもメインウェポンとなるアサルトライフルなどを外さないと装備できないのである。

まさに特攻覚悟の自殺行為。

これを持つ大体の戦闘スタイルは一人殺して自分も死ぬというのがほとんどなのだ。

それを1対1のタイマン勝負。しかも、こちらは銃を持ち向かい合わせの状況であったのにもかかわらずに戦火の皇女とまで呼ばれた彼女は負けた。

その様子を見ていた味方ギャラリーのボイスチャットからも「おいおい……」やら「オマイガア」と嘆く声が聞こえてくる。

『こいつもしかしてチート？』

一瞬、少女は負けたということが信じられず、チートという改造行為をしたプレイヤーではないか疑った。彼女は確かにあのときナイフで仕留めたと確信したはずなのに前方でその姿を消し、いつの間にか後ろに回りこんでいたのだ。あれは常人の動きではない。

「まあそれもすぐにわかること」

ゲームの終わりにはラストキルカメラといい、最後に仕留めたプレイヤー画面が参戦した全員に見れるようになる。

この時になんらかのチート行為が見つかれば少女の無敗は守れるはずだった。

モニターにはその軍刀を持った男のプレイヤー視線が映し出された。

男の前には一人の女性キャラと対峙していた。

彼女は間違いなく爆弾を仕掛けたばかり優理の持ちキャラだ。

男は銃が撃たれるタイミングをまるで知っていたかのように横に平^{スラ}行移動を開始。^{イド}

そして、発射された銃弾を華麗に避けていく。

『ここまではまだいい、問題はここあとだ』

優理のキャラはリロードに入り、その瞬間に男のキャラは猛然と歩み寄る。

ここで男と優理にはナイフでの間合いに入っていた。

先に手を出したのは優理のキャラだった。

この距離ならナイフが男の身体に突き刺すと思っていたからだ。

が、それはとんだ勘違いだった。

彼はその間合いの瞬間に身を引いたのだ。

ギリギリのはずだった間合いはそれを解かれ、今度はその優理のキヤラを中心にまるで円を描くようにターンをして、後ろに回り込む。この時、彼女はナイフを出す為に突き出た腕で、その視界は遮られていたのだ。

そして、それが姿が消えたと錯覚した。

切り刻まれる自分のキヤラを見たあとに男はすぐに爆弾の解除まで走っていった。

このキルカメラを見た全員はあまりのプレイに開いた口が塞がらなかった。

『こいつは間違いない……変態だ』

優理は確信する。自分以上にこのゲームを網羅していると同時にそれを実現させる手腕。そして、人の行動をまるで手の平で躍らせるようにわかる思考。

まさに【変態】。これは褒め言葉であるにも同時に皮肉の意味合いが込められていた。

現実の世界で我に返ると優理は手汗握っていたパソコンのマウスを投げ飛ばす。

「あああああ！ くそっ！」

女子高生とは思えないその暴動は、まるで素行の悪い不良と似ているものがある。

「あんな変態に勝てるかよ！ マジありえねええ！」

強者を目の前にし、彼女のアドレナリンが最大まで放出されるような気分になる。

そこで急に部屋にトントンとドアのノック音がした。

「ちよっとこんな夜中にうるさいけど、どうしたの？」

ドアが出てきたのは彼女の母だった。

瞬間に彼女はパソコンのモニターを消してテレビを点ける。

「ごめん、お母さん。ちょっとテレビの音量を少し大きくしてみた
い」

さっきまでの彼女とはまるで別人の人物がそこにいた。

「夜中なんだから、もうちょっと音量下げることと、明日も学校で
しょ。早く寝なさいね」

「はい」

母が出ていくのを確認するやいなや、パソコンモニターを再び点けて先ほどのゲーム画面が映りだす。

そこには参戦したメンバーが分かるようになっており、先ほど彼女のキャラを殺したプレイヤーを探し出した。

『こいつだ……間違いない』

キャラクターの容姿は自由に作ることが出来、それを他のメンバーから回覧できるようになっている。

そのモニターに映し出されていたのは自らを殺したキャラクター。

ハンドルネームは――IBA

短い3文字の名前は妙に頭へと焼き付けられる。

優理はそのまま布団にもぐりこみ、そのモニターに映し出されるキャラクター――IBAを見つめた。

『IBAとかいう奴、いつかお前を蜂の巣にして、その死体にC4
つけて原型留めてない肉片にして鳥のエサにするから覚悟して
なさいよ』

彼女は恐ろしい復讐するという誓いを立てて、そのまま眠ることにした。

#02 偶然の再会

ここは優理が通っている公立台田高校だいたは県内では平均的な偏差値の学校。

男女共学であり、地元の学生のほとんどはこの学校に通っている。

「おはよー優理ー！」

明るくて元気な声がその朝の学校の教室に響いた。

「お、おはよー……」

優理はその声の主にバレぬよう目立たないように机に身を伏せていたが、それでもなおこの主にはバレてしまう。

身体は伏せた状態で顔だけを上へと持ち上げると、いつの間にか少し髪を染めているのであろうか、ブラウン色の髪をした女子が優理の座っていた前の席に立っている。

自分より高い身長、自分より遙かにかわいい顔、自分より大きい胸。この声を発する人物は優理にとっては耳障りなものと同時に自分への劣等感を生み出していた。

これがこの声の主、にいがさ あおい新笠葵だ。

「なにになに？　なんか目の下くま出来てて暗いけど、また寝不足？　悩みがあるならお姉さんに相談してみなしゃいよ」

まるで本当の妹かのように接してくるこの人物に内心ではキツと睨みつけていたが、表の顔では――

「ううん、ちょっと夜遅くまで勉強してて」と軽く嘘をつきながらにこやかな笑顔で返した。

「もうかわいいなー優理はーあはははー」

そういつて葵は持ち上げていた優理の頭に手を置いて撫で始める。優理はどうもそれがいつも撫でられるのは嫌のようで、撫でている

葵の腕を掴んだ。

「髪……くしゃくしゃになっちゃうから」

「ああーごめんごめん。でも、ほらなんか優理って市松人形みたいだから何かいじりたくなって」

『市松人形って……褒め言葉として受け取っていいのか、これ』

「ねえねえ、三つ編みにしていい？ いいよね!？」

『うぜえ』

葵は優理の応えも聞かずに机の後ろに回って勝手に髪をいじり始めていた。

はたから見れば、それはまるで人形遊びをしている女の子の図だ。

優理はその間に他の教室にいるメンバーを見渡す。

『でも、こいつしか友達いないのはマズイな……といっても今の女子の話題に付いていけないし、何より話に合う連中って……』

彼女はそのまま教室の隅で固まっているピザ体型のメガネをかけた男二人組に目をやった。

「弟よ、やはり至高の銃はAK47ですな。ワタクシもFPSの愛用銃ですし、何より威力が高いですぞ」

「いやいや、兄者。やはりP90のが50発という装弾数に加え、あの反動の少なさには圧倒されるものがあるでござる」

どちらかという彼女自身は彼らの話が興味がそそられる話ばかりだった。

すると葵が優理と同じ方向を向いていたのか「またあの似ているのに血の繋がってないミリオタ兄弟か。銃なんて怖いだけの野蛮な兵器じゃないの」と影口を叩くように優理に言う。

『はあ!？ 銃とはロマンの塊なんだよ！ それをただの野蛮な兵器と申したか!？』

と優理は内心で思ったことをそのまま口に出してしまうところだっ

たが、何とか思いとどまることが出来た。

「そ、そうダネー。怖いヨネー」

「なんでカタコトになってるの優理？」

「気のせい気のせい」

いつの間にか優理の髪は三つ編みになると、それを満足したのか葵は「じゃあ、ちょっと和美と^{かずみ}こ行ってくる」と別の友達に会いにそのまま離れていった。

優理は机に伏せながら、外の窓の方へと目をやる。

高校に入って2年。満開だった桜の花はどこへ行ったやら、もう梅雨が近づきつつある5月だ。

鳥の声が聞こえてくるこんな平和な学校で一体何を楽しめばいいのかと彼女は思っていた。

「はあ……今ここが戦場ならな」

そんな物騒な妄想をしていると、突然現実に戻される一言が先ほどのミリオタ共から聞こえた。

「そういえば毎朝恒例の早朝巡回に掲示板で見たのですが、サチデスで無敗を誇っていた【戦火の皇女】が負けたらしいとスレッドが立っていましたぞ」

『け、掲示板に！？』

彼らが言った掲示板というのは間違いなく某巨大掲示板のコマンドーオブクロス板のことだろう。

その板では雑談をはじめ、悪質プレイヤーの晒し行為、そして特に秀でたプレイヤーの通り名を決めるといったコマンドーオブクロスにおいては重要な存在になっていた。

「それなら接も見ただござる。確かニコヤカ動画の方にも、その戦いが動画でupされていましたでござる」

『ニコヤカ動画にも!?!』

こちらは一般人にも浸透してきていると言われている有名な動画サイトの方だ。

「しかも、その動画がランキング入りとか、まったく戦火の皇女も有名人ですな」

「皇女が負けて恥辱プレイを想像している輩が増えているらしいでござる」

『勝手に人のキャラを恥辱すんなよ!?!』

「ほう、これは薄い本が厚くなりますな」

『誰がそんなの書くんだよ!?!』

これ以上は優理自身、耳を塞ぎたくなったが、そのような行動をさせてはくれないワードが出た。

「しかし、やはり注目すべきはあの【軍刀の男キャラ】ですな」

「ああ、ハンドルは【IBA】という名ですな。確か国際ボディガード協会というのがそんな名前で……まさかその関係者という点は? 元軍人ばかりの組織ですし」

「そこに気づくとはやはり兄者は天才でござるな」

『なるほど……ということとは相手は本職の元プロの可能性があるってことね。でも、ゲームと現実はまったく違う。あんな動きは軍人とても並の玄人プレイヤーでもマネできないし、そんな奴らなら私が間違いなく勝ってる。そして、あのナイフアーというハンデを負った戦い方。軍人というのなら、なおさら銃で攻撃しようとしてくるのじゃないかしら』

優理はあの軍刀の男の正体を気になったが、すぐに考えることをやめた。なにせ膨大なネット世界だ。

個人のデータを探るなんてハッカーでもない限り無理だし、知ったところで別に会いに行つて文句を言いくわけでもない。しかし、

その前に一番の感情は奴に対して復讐というリベンジをすることだけだった。

高校の1日も終わり、帰宅部代表ともいえる優理は足早に家に帰ると学生服のまま、パソコン画面を突けて、コマンダーオブクロスを起動した。

「さて憎きIBAはログインしてますのかね」

このゲームはハンドルネームさえ分かっただけで、そのゲームをやっているのかサーチする機能が付いている。これを利用して、チームに招待をしたり挑戦状を突き付けたりすることもできるので彼女もそれを実行しようとしていたが――

「ログインしてねえな。廃人ニートとかだったら確実にいると思っただけだ」

廃人ニートとは職業ニートであるにもかかわらずネットゲームなどにどっぷりハマってる空想世界がむしろ現実リアルの人たちのことである。たいてい、あのような腕を持つ【変態】という輩は廃人ニートの可能性が高いのだが――

「となると働いている人の可能性がある……ってことか」

彼らは四六時中ゲームを点けっぱなしするので、こうなってくると一般人という予感が優理にはしてきた。

「しかし、あれで一般人……うーん。いいや、とりあえず復讐する為の練習しよ」

深く考えることはやめて、チームデスマッチと呼ばれるルールで参戦することにした。

このルールではチームに分かれて、対戦し、キルした数を競い合うというもの。

死んでもすぐ復活できるということから飽きずにサクサクとプレイ

ができる。

たいていのFPSゲームでは基本となっている為か、このルールで参戦する人の数はいつも多い。

「さて、始めますか」

チームが決まり、こちらが6人で相手は5人。

この場合だと途中から相手チームに自動で1人追加されるので人数の心配は無用だ。

「さて足手まといにならないよう頼むわよ、お前ら」

ボイスチャットではないので聞こえはしないが、そういつて語りかけるように仲間に願をかける。

戦場はこの前のジャングルとはうって変り、近代都市での市街戦だった。

ここではビルからの狙撃を気を付けなければならなく、置いてある車はしばらく攻撃を加えると爆発仕組みになっている。優理にとってこの車は大好物だった。

作戦開始後、優理は崩れ落ちたガレキの物陰に隠れて、ひっそりと頭を出し敵の数を確認する。

真正面から来ているのは3人。そして、そこには大好物の車の近くにいた。

「ははは、燃えろー！」

アサルトライフルM4A1に装備してあるグレネードランチャーからポンと気持ちのいい発射音がすると、そのグレネードはその車目掛けて飛んでいく。そして、車に触れた瞬間、大爆発を起こして敵3人は一緒に燃え上がりながら吹っ飛んでいった。

「ファーストキルで3人同時とかウマー」

優理が戦火の皇女と言われる由縁はこの爆発好きから来ているものだ。

「さてこのまま狩りを続行しますかね」

まるでハンターと獲物という構図が出来きそうな勢いだったが、突然相手チームに1人加わったとゲームメッセージが現れた。

優理は何気なく誰が来たのか、味方と敵のメンバーリストを開くとそこには先ほどまでいなかった見覚えのある名前が加わっていた。

『間違いない……!!』

あのときの復讐の相手、軍刀の男【IBA】がそこにいた。

#02 偶然の再会（後書き）

ちなみにイメージしたFPSはCODとBFとSAです。

#03 復讐の戦火

「IB A……」
あいびーえー

優理が参戦しているチームデスマッチの参戦メンバーリストには I
B A の名前があった。

復讐をすると決めた相手がこうも偶然に目の前に現れたのだ。

『うおおおお！ キタァアアア！』

優理は発狂し立ち上がった。その姿はまるで1人の少女が狼に変身
し遠吠えを上げるのと似ている。

と、すぐにマウスに右手おいて左手の指を A W D の文字キーに置く。

『あわてるな……いくらさっきまでサーチしてもいなかったのに、
いきなりログインしてきて偶然この相手チームに入ったという何
万分の1の確率を目の当たりにしたところで、勝てるものも勝てな
くなる』

彼女は今までの経験から熱くなったら負けるということ心得てい
た。冷静に事を判断し、戦略を練ることがこのゲームにおいて重要
なのだ。変に熱くなればマウスの照準を合わせるスピードがいい加
減になり、銃の命中率が極端に下がる。

これこそ一流のソルジャー。彼女でもここまで来るのに2年の時を
費やした。

『今すぐ探して仕留めたいけど、ここは我慢だ。慎重にまずは目の
前の敵を倒していかないと』

優理が慎重になる理由はこのゲームルールのせいだった。昨日のサ
ーチ&デストロイとは倒されて死んだ場合、そのゲーム終わるまで

復活することはできない。しかし、このチームデスマッチは逆に何
度も復活することができてしまう。

つまり、無理やりI B Aを倒しにいったとしても復活した敵たちに
すぐ囲まれてしまう可能性があるのだ。彼女のプライドとしてはこ
れでは本末転倒だった。

『しかし、逆に奴がこ^{I B A}っちに攻め入れれば、こちらの味方に囲まれ
るはず……ちよつと卑怯かもしれないけど、これが戦略というもの
よ』

彼女はあえて先ほどもでは目立たぬように味方たちの後ろの方へ
とキャラクターを引き下がらせる。

「そのうちに奴が出てくるはず……」

そう思っている束の間に味方の群れから外れた一人が突然ナイフキ
ルされたとゲームメッセーじに表示された。キルした人物は優理は
もはや予想していた。

「やはりI B A。しかし、奴は団体行動ができていない三流。これ
でいい気になるものじゃないわね」

優理の味方チームの配置は後ろのビルにスナイパーが1人。優理は
同じくサブマシンガンやアサルトライフルを装備した歩兵3人の後
ろに着いている。そして、先ほど団体行動できていない、またもや
走り回っている輩が1人だ。

『たぶん、この走り回っているのは期待できないわね。この3人の
歩兵部隊に合わせて一緒に行くのが定石といったところか』

案の定、出てくるI B A以外の敵はどんどんやられていく。

「よし、他の敵は今頃スタート地点だ。近くにI B Aが出てくるは
ずね」

その時だった。突然今まで後ろのビルにいたはずのスナイパーがナ

イフキルされたとの報告が出る。

『突破されていた！？　くっ、他の敵に目をとられている隙にやられたわね』

すぐに優理は3人の後ろにいたのを方向を変えて、今度は前に出る。そして向きを変えて、今度は後ろにあったビルの出入り口に銃を向けると同時に前にいた3人も後ろのビルに銃を向けた。

『あら、なかなか物分かりが良いメンバーのようね』

そのうち間違いなく奴がそのまま入り口から出てくるはずだと予想するが、なかなか出てこない。

これでは復活した奴らと合流する危惧があったので足を動かそうとするが、前にいた3人の一人がビルへと歩き出した。

『あっ……しまった』

ビルの出入り口の隅にチラリと影が見えてしまった。

『それは罠よ！』

叫んでもボイスチャットが付いていない優理の叫びは意味がなかったものだった。

先ほどのまでの一人が突然その場を倒れる。そしてゲームメッセージにはナイフキルという表示。

残り2人もそのことに気づいたのかあわてての銃の射撃が出入り口へと発射される。

「ダメ！　焦っちゃ！」

突然、そのビルの出入り口からランツと何かの物体が放物線を描いて、こちらの方へと落ちてきた。

『あ、あれは！』

その瞬間に優理のキャラは伏せると、物体は突然まばゆい閃光を放ち突然キーンという耳鳴り音と視界が真っ白になった。

「やっぱりフラッシュバン！」

フラッシュバンとはいわゆる閃光手榴弾のことで殺傷能力がないも

の、こういった耳と視界を一時的だが封じることができ、敵の動きを止めることができる。

前方二人はそれを直にくらった為か、そのダメージはとても大きく、まともに動けないでいた。

それを狙ってか、まるで腹を空かせた猛獣が獲物に飛びつくように出入り口から軍服の男が飛び出てきた。

『間違いない……左手に軍刀。軍服の男キャラクター——IBA！』

IBAは前方にいる動けなくなった一人を、軍刀の刃をさっと抜いて、一撃で斬った。

まるでそれがスローモーションの映像のようにゆっくりと倒れていく。

次に残るもう一人をまた同じくトドメを刺そうとしていたが、そこで優理のキャラは正気に戻った。

とっさに伏せていた為にフラッシュバンのダメージが少なかったからだ。

「やらせるかあああ！！」

トリガーを思いっきり引いたアサルトライフルはダダダとIBA目掛けて銃弾を発射していく。

しかし、優理にはもう気づいていたのかとっさに刃を鞘に収め、また昨日と同じように横へと平行移動して銃弾を避けていった。

スライド

仕留められなかったことに少しイラ立ちを覚えた優理だったが、IBAが先ほど向かった先を見てニヤリとする。そこは曲がり角になって行って行き止まりだ。

『こちらは二人で数には分がある。フラッシュバンもさっき使ったし、いくら脅威の弾除けをしようが二人の行き止まりのところで二人の銃弾を避けきることなど不可能』

優理は過去から昨日までずっと勝利を確信してきたことは癖のようになっっていたのに、まるで久々に勝利を確信していた。

前方にいた1人も視界が正気に戻り、そのことを分かっていたのか

すぐにIBAのあとを走って追いかける。

優理もそのあとに走って続き、段々と件の曲がり角が見えてくる。

『あの先によりやく復讐の敵が――！』

しかし突然、優理に何か電流のようなものが走り、なぜだが冷や汗も出てきた。

『曲がり角……？』

即座にその曲がり角に進む途中だったが、優理のキャラは足を止める。

目の前にはそれでもなお進んでいく味方、そして曲がろうとしたその時――

「バサッ」

さっきまで走っていた味方はその場に倒れ、曲がり角から長い刃がキラリと光るのが見えた。

「角待ちを誘い狙っていた！？」

角待ちとは角に立っていることで視界から見られることなく突然曲がってきた敵を瞬間的に狩ることができる基本戦略のこと。優理は驚いていた。いくらがそれが基本戦略といっても――

「あの状況でとっさにこの戦略を思いついて、わざと誘ってきたというの……？　ありえないわよそんなの」

長年の経験をしてきた優理は、そのことが予想できなかったことにますます怒りで腹立だしくなってくる。

だが、とっさに虫の知らせで優理の位置はIBAとはナイフにも届かない絶好の位置にいた。

『銃弾ではまた角に隠れられる。それなら！』

すぐに優理はある物体をその曲がり角のほうへと投げつける。

「スタングレネード！」

スタングレネードはフラッシュバンのように殺傷効果はない手榴弾であり、同じくその物体から閃光が放たれるが、こちらの効果はこのゲームにおいて視界を奪うことではなく動きを鈍くするだけの効果だった。

しかし、これでIBAは優理の目論見通り、自慢の機動性は封じられた。

「これで終わりだ！」

優理はM4A1に装備されているグレネードランチャーに手を伸ばす。この距離なら曲がり角の壁部分に当てれば爆発でIBAを巻き込み、自身に被害はないと推測したからだ。

いつの間にか汗で滑りやすい優理の右手はゆっくりと右クリックが押されようとしていた。

「おしいな」

突然、何か聞いたこともないような男の声が頭の中で響く。

そこにはチラリと曲がり角を覗かせているIBAが言ったかのように聞こえた。

そして、優理がクリックを押すと同時に優理のキャラが倒れこむ。

「……えっ？」

優理はあまりの出来事に理解できずにいた。どう考えてもあの状況なら倒れるのはIBAのほう。

『別の敵が仕留めに来た？』

しかし、その線はすぐに打ち消すかのようにゲームメッセージには確かにIBAからナイフキルされたと表示されている。

「も、もしかして……」

優理が相手が軍刀なんて使っている相当の刃物好きだとちゃんと理解していれば、こんなことにはならなかったはずだった。もし理解し

ていれば簡単に予測できた。
その答えを示すかのように自らを殺したIBAのキルカメラが映し出される。

それにはスタングレネードで動きが固まった直後に軍刀を戻し、【投げナイフ】用のナイフを取り出すIBAがいた。そして、それを見計らったようにナイフを優理のキャラへと投げ、見事頭に突き刺した。

『ば、化け物だ……』

変態を通り越して、こいつは化け物だと悟った優理はそのまま強制ログアウトし、その戦場を無理やり離脱していった。優理はそのまま真っ暗になったモニターを見つめながら、しばらくパソコン機のイスに茫然と座りつくす。気が付くと優理の手はいきなり震えだしていた。

「なに……なんなの？」

それはあまりの恐怖だった。もはや彼女にとってFPSは人生となつて経験を積んでいたものを簡単にその城が落城される気分だった。

なんとなく自分の部屋なのに居たたまれなくなった優理はそのまま家から飛び出していった。

#03 復讐の戦火（後書き）

次回でようやくIBAの中の人登場

#04 片腕の男

優理はハッと気が付くと近所のコンビニのイトインスペースに座っていた。

「そういえば学生服のままじゃん……ああーしばらくは休業しておこうかなー」

ゴロゴロとまるで自分の家のようにテーブルに身体を預けながら座っている――

店員共が「あの子、何も買わずに何時間いるんだよ……」とヒソヒソとこちらを向きながら話をしている。

『うっさいわね……そういえばもう何時だったのかな』
コンビニにある時計を見ると、もう20時になっている。

帰ったのは16時でそれからゲームして、このコンビニに来たのは17時。ということは3時間ここに座っていたということになる。

『やべ……さっさと帰らないと』

いい加減戻り、席から立ち上がったあとそのままコンビニ出る為ドアを押し開く。

しかし、彼女はあまり下向きながらドアガラスの向こう側をちゃんと注意していなかった為、何かドコンと何かにぶつかったような感触がした。

「うわぁ!？」

男の短い悲鳴が聞こえドサツと鈍い音がした。

「な、なに……?」

急いでその何かを見ると……長袖シャツを着ている短めの黒髪の男がそこに倒れている。

「えっ、えっ。どうしよう……と、とりあえず大丈夫ですかーそこ

の人!？」

倒れている男の手を握ろうと、そばにより長袖の右腕部分を掴もうとする。

『あれ……おかしいよね』

何か違和感を感じて、その袖を離して自らの腕を触って感触を確かめた。

そして、それが分かってしまうと同時に頭の中で浮かんだ言葉をそのまま口に出してしまった。

「み、右腕がない？」

男はハッと気づくと、すぐに自力で立ち上がる。

「……別に世の中、いろんな人間いるだろ。足がない人もいるし、目が見えない人もいる」

「あ、ご、ごめんなさい」

少し憎まれ口をたたきながら、左腕で服やズボンに付着した汚れをパツと振り払った。

「やっぱ腕が1本無いで倒れると受け身って取りにくいんだな」

そういつて、先ほどの憎まれ口を叩いたわりにはブラックなことを言っている男がハハッと笑うようにこちらに返してきた。

『な、なんてブラックなこと言っているのこいつ!？』

「すいません。では、私はこれで」

あまり関わらないのが賢明だと判断した優理はすぐにその場から離れようとするが、ガツと急に肩を掴まれた。優理は突然の出来事に「キャッ」と驚いてしまったが、すぐに男は「ごめんごめん」と謝った。

「ちょっと買い物手伝ってくれない？」

『はあ!？』

なぜいきなりこんな初対面の相手して、そんなことを頼まれるだろうか優理は理解できなかった。

「ああ、でも私急いでいるんで!」

しかし、男は先ほど優理が座っていたイートインスペースがある窓

の方へと指を指しながら

「こんな学生服の女の子がそのテーブルでくつろいでいたと思えないセリフだな」

と見え見えの嘘を暴いてため息をつくように言った。

「み、見られてた！？　で、でも本当に急いでいるんで！」

「仕方ないな……これだけは使いたくはなかったんだが……」

そういつて男は突然、そこにうずくまり左腕を上げながら「うう……」とうめき声を上げた。

「さっき転んだ時に残りの左腕までもが……これじゃあ晩のおかずが買えない……」

『え、演技だああ！？』

「わ、分かりましたから！　無理にそんな演技しなくていいですから！」

そう言ったあとケロッと男は立ち上がり「はは、悪いね」と笑顔で言った。

「じゃあ俺がカゴを持つから買いたい商品を取っていつてくれないかな」

男はコンビニ入った際に優理にそう指示をする。

「ええと、まずはそのハンバーグ弁当とああ、あとそのパスタも……それとおにぎりは鮭味しか認めない」

「ちょ、食べ過ぎなんじゃないんですか！？」

あまりにも成人男性1日のカロリー摂取量をオーバーしている量がカゴの中には存在した。

「大丈夫。その分の消費量は半端ないよ。それに右腕には脂肪の付きようがないからね！」

「ぶ、ブラックなジョークはやめてください！」

優理にとってこの男のポジティブな考えには心底驚いてしまう。

「まともなこと言うと、ほら普通の人は両腕で力使えるけど、僕の場合は1本だから普通の人より2倍の力がこの左腕に負担をかける

ことになる。必然的に力つけないといけないからね、だからそんな食の量ってわけで」

「そ、それにしても食べ過ぎですよ……」

「ははっ」と笑いながら弁当のエリアはそこらにして飲み物のほうへと向かう。

優理は冷蔵庫の扉を開けて「飲み物はどうします？」と男に声をかけた。

「ああ、じゃあドクペ取って」

『ドクペ……だと？』

彼女は開けていた扉を静かに静かに……閉めた。

「ど、どうしたの？」

男がその行動に恐る恐る聞いてみると「お前もその道か……」と彼女はブツブツとつぶやく。

そして、男に指を指し――

「どうせお前もなんたらゲートとか神様のなんたらなんかでハマった口なんだろう！ そんな奴に飲ませるドクペはここにはねえ！」

と豪語する。

「すまん、何のことだが意味不明なんだが……」

男は何のことだがまったく意味がつかめていなかった。

「えっ、知らないの？ ドクペ飲んでるのに？」

「あー飲みはじめたキツカケといったら前に見たハリウッド映画でバカな主人公がドクペを飲みすぎてアメリカ大統領のトイレを借りたっていうことかな」

と、男は優理にはまったく何の話だ分からない映画の話をする。すると優理は先ほどの発言がコンビニにいるというのに恥ずかしくなり、チラッと店員の方を見ると「プー」と笑いを我慢している顔でこちらを見ていた。

「ま、まあいいわ……それなら、あんたにドクペを飲む権利はやる

う」

優理は冷蔵庫の扉を開けてドクペのペットボトル1本を男のカゴに入れた。

「ドクペ、好きなの？」

男は聞くと、優理はコクリと小さく頷いた。

「んじゃもう1本頂戴。買い物付き合ってくれたお礼」

「わ、私はそんな安くない」

「それは失礼ごさんした」

男はドクペをもうカゴに入れてもらったあとレジに行き、器用にサイフを出して片手でお札を取り出し、小銭をジャラツとレジ台の上に並べる。

「ええと、814円だからはい、1014円で」

サイフの口部分が開いている状態で台と足の間に押し付けて、小銭をその台滑らせるようにしまう。

『な、慣れていらっしやる』

その一連の動きはとても見事しかいようがないものだった。というより優理はそれを感じする前に手伝えばよかったと少し後悔もした。

コンビニに出たあと優理は頭を少し下げて謝った。

「ご、ごめん。最後手伝ってあげなくて」

「ああ、いいのいいの。買い物付き合わせちゃったのもなんか悪いと思っただしね」

「それならどうして、付き合わせたりなんか……」

「……まあ、俺も男だしね。女子高生と接点持てるかなと」

優理は少しフツと笑ってしまった。

「それにしても初対面の人に対して厚かましすぎますよ。まあ私も吹っ飛ばしちゃったので悪かったです」

「はは、これでお相手ってことで。まあまたそのうちどこかに遊びにでも」

「行きませんよ」

優理がその答えに即答すると男は優理が言葉のあやに引っかかると思ったのか「おいしいな」と苦笑いした。

突然、何か頭の中でその声がりぴーとで再生される。そのフレーズを聞いたのはつい最近あった気がした。

「あ、あの。私どこかで会ったことありますか!？」

彼女は焦りながら男に問い詰めたが「えっ? いやあ、女友達は少なかったから、いたら君みたいなの子は覚えているはずだって」と男も見覚えのないと思われるような発言をする。

「そ、そうですよね。すいません、忘れてください」

「……」

男は無言で片手で持っていた袋をまた器用に片手で漁り、ドクペを1本取り出して優理に向かってそれを投げた。反射的に優理は受け取って、男を見るとすでに遠くのほうまでへと行っている。

「まあ、どこかで会ってるかもしれないな。世界は狭いからな!」
そう言って、男は駆け出してそのまま見えなくなっていった。

「そういえば、初めて父さん以外の男の人と会話した気がする」
優理にとって学校でも葵以外の生徒とはまともに話したことなく、何か気持ちに新鮮味があった。

「ふふっ」

自然に笑みが出てきて、先ほどもらったドクペのペットボトルの蓋をあける。

「プスーッ!」

ドクペは勢いよくまるで野球が優勝したときのようなシャンパンフアイトの噴出の仕方をした。

「あ、あの野郎! そりゃ炭酸投げればこうなるわ!」

優理は服がベトベトになりながら見えなくなった男に文句を叫んだ。

#05 転校生の男

「うーうー」

優理は朝から機嫌が悪く、いつものように机に身体を預けてうーうー唸っていた。

「どうしたの優理。なんか体操服だし……制服は？」
その横に心配そうに話しかける新笠葵。

『これも全部あいつのせいだ……』

昨日、優理はコンビニで片腕の男にもらったドクペが噴出し、制服がベトベトになったまま帰宅せざる負えなかった。

「あの男……今度会ったらたじやおかねえ……」

「な、男!？」

葵が優理から初めてそんな言葉を聞いたらしく驚いて声を上げる。

「男ってどういうこと優理! まさか力づくで、あんなことやこんなこと……」

「ああー、大丈夫そんな目にはあってないけど。ただまあドクペをかけられて……」

「なんて特殊プレイ! 私の優理に手を出すとは、その変態男。私がつちめてやる!」

「ああーまあ、いいか」

実際は向こうはお礼のつもりでドクペを投げたのだろうが、優理はその説明をするのも面倒なので、深くは説明しなかった。

『まあ、どうせもう会うことはないだろう』

キューーン。

直後、頭の中で閃光が走り、妙な胸騒ぎがした。

「ははは、まさか……嫌な予感がするわ」

優理はFPSを長年していた為に、次の相手がしてくる手というものをあらかじめ想定して行動するというスキルを身に付けていた。しかし、そのスキルをあまりにも多用しすぎた為に現実でもその能力がたびたび発揮されてしまうという現象が起きた。

直後、始業のベルと共にガラッと教室の引き戸が開く。

「はや、もう先生来たのかな」

葵は急いで自分の席に戻ろうとし、優理はその教室の戸から出てくる人影を見ていた。

その影には妙に最近見覚えがある。

『いや、まさか……でも先生じゃないよね、あれ』

彼女たちのクラスの担任は国語担当の女性教師のはずだった。

しかし、そこに現れたのは同じこの学校の制服のブレザーを袖を通して、肩にかけているだけ、下に着ているシャツは上ボタン2つ開けて、中の黒いTシャツが見えている男。

「おーっす！ お、時間ギリギリだ」

その男は短く挨拶したあと、そのすぐ上にある時計の時刻を見た。彼はそのままのしのしと教室に入ってきて、ミリオタ兄弟の弟の場所に立ち止まる。

「お、お前、伊藤か！？ 元気にしてたか？」

「や、拙者は伊藤とかいう者じゃござらん。お主、何か教室を間違えてござらんか？」

「えー、隣行っても、ここじゃないだろと言われたからさ。また教室間違えたかな？」

首をかしげて「ほんと俺の教室ここじゃね？」としつこくミリオタ弟に食い下がっている。

「ねえ、あの人なんなんだろう？ あんな人この学校で見たことないし、それになんかブレザーで隠しているけど、右肩の部分おかし

くない？」

その状況を見た葵は自らの席に着こうとしたのを引き戻り、ヒソヒソとこちらに話しかけてくる。

優理はその話が一切頭に入ってこず、その頭を抱えていた。

『あ、悪夢だ……』

もう会はずなと思うていた奴が、なぜかすぐそこにいた。

「ど、どうしたの優理？」

葵は優理がおかしいことに気づき、心配そうに声をかけるが――

『私は今※ギリスーツを着ているんだ。これなら、奴も見つかることない』

※カモフラージュ用の迷彩服のこと

彼女はFPSを現実にイメージしながら、ことが終わるまで待つことにしていた。

『奴はまだミリ弟と会話している。このまま過ぎれば……なんとか』

「なんだ伊藤じゃないのかよ。ええーと、他に知り合いは……お」

男は優理を見つけていた。見つかるはずだ、なんせ今日の優理の恰好は制服を着ている中でただ一人体操着姿なのだ。男は段々と優理の席の方へと近寄ってくる。

「君はマリヤちゃんじゃないか、いやあお久しぶり」

「誰がマリヤだ！」

いきなり違う人の名前の言われて、即座に優理は反応してしまった。男はそれを見てニヤリとしている。

『し、しまった！ つい条件反射でツツコミしてもうたー！』

「はははっ、知ってるよ。いやあ奇遇だね、同じ学校だったからもしかしたら会えるかなと思ったけど」

この男は優理がツツコミをするのを計算して、あのような軽いウソを言っていた。

『はっ!?!』

とっさに周囲の視線がこちらに集中しているのが分かった。

「知り合いたいね……」

「あの子、葵以外は友達いないと思ってたけど、変な子と友達はい
るみたいね」

ヒソヒソと周りの生徒たちはこちらの話をしている。

『ぎゃあああ、私のクラスの立場がさらに危うい状態にー』

「そうそう、まだ自己紹介してなかった俺の名前は……」

「その前に!」

葵が突然、その間に入る。

「あなた一体何なんですか。うちの優理とは顔を知っているよう
ですが……まさかあなたが優理から聞いた昨日のドクペの!」

「ああー、ドクペね。うん、確かに」

「貴様かー! うちの優理をたぶらかしたのはー!」

「ぬ、ぬわー!?!」

葵はそのことを聞くと逆上し、その男に掴みかかろうとする。男も
そうさせまいと避けようとした、その時肩にかけていたブレザーが
ハラリと下に落ちた。

「きゃっ!?!」

その男の姿を見た者は小さく悲鳴を上げて、そのまま教室はシーン
と静寂になる。

「あ、あなた。そ、その右腕は……?」

葵が先ほどのまでの威勢はどこかに行き、男のその姿を目を丸くしな
がら聞いた。

「あーあー、せっかくみんなにサプライズイベントでやろうと思っ
てたのに」

『だから、ブラックすぎなんだよ……』

優理は昨日に引き続き、相変わらずの男のブラックな発言に呆れて
いた。

その時、教室の引き戸がまたガラツと開くと、次こそは担任の先生がやってきていた。

「こらあー山神くん！ 先に職員室向かってと言っただろうがー、先生探しちゃったぞ！」

「はは、ごめんごめん先生」

山神と言われたその男は申し訳ないという素振りを見せずに息を少々切らしている先生に対して、少し笑いながら謝った。

「ああー、とりあえずみんな座って。いきなりこんな時期だけど、転校生を紹介するわ」

先生はそういつて教壇に立つと山神は落としてしまったブレザーを拾い上げて、その隣に立った。

「どうも、山神^{やまがみ}息吹^{いぶき}です。先にサプライズイベントは行ってしまったので、特にあとおもしろいことはありませんが。ああ、そうそう僕と握手求める時は右腕ないんで、左手限定でお願いしやす」

息吹のあまりのブラックさに生徒たちは静まり返って、気持ちが沈んでしまっていた。

「こらー朝から元氣なくなるというな。じゃあ、あとの話は直接本人聞いてもらうとして、とりあえず席はー」

そういつて、先生は教室を見渡す。しかし、そこにいた生徒たちの全員は優理をジロっと見つめた。

『む、無駄だぞ。私は今座っている席は一番前の列の窓側。転校生は一番後ろにある余った席に行くはずだ。そうやすやすと都合よく隣に……』

「あつ、先生」

息吹が突然、先生に向かって挙手をする。

「どうした山神くん」

「俺、最近目悪いんで前の席にしてもらっていいですか？」

『おい、なんだと。なぜ今そこでそんなワードを言う』

「だがなあ、今余っている席は……」

先生も席をいちいち変えるのが面倒なのか、渋りだしている。

『よし、断れ。そこは我慢という言葉をもその男に覚えさせるんだ!』

「あ、先生。私、後ろの席に変わってもいいですよ」

優理の隣で座っていた女子がいきなり手を上げながら立ち上がる。

「お、そうか。じゃあ山神くんはそこに……」

『ま、待てーい!?!』

叫び声を上げそうになったが、持ち前の気の小ささに言い出せなく、そのまま息吹は優理の隣へとやってきていた。

「お、こんな偶然あるもんだね」

息吹は隣に座っていた優理にどこかうれしそうに話しかける。

その時、優理は見ていた。クラス全員が「よし、ミッシェンコンプレイト作戦成功」という顔をしていたのを。

『登校拒否起こそうかな……私』

右腕がない奇妙な隣人を前に落胆する優理だった。

#06 ネット喫茶むーんらいと

「優理ちゃん」

「……」

「ゆーろーりーちゃん」

「……」

「ふむ……優理たん」

「ええい！ うつとしい！」

今日の授業も終わり、放課後。先ほどから優理の奇妙な隣人となった山神息吹から話しかけ続けていた。

「なぜか他のみんな俺のこと無視するだもん。ねっ、ドクペ奢った仲じゃない」

「ああー忘れかけたけど思い出した。あのドクペのせいで私の制服がベトベトになったんだわ、許せん！」

「そ、それは知らないぞ!？」

優理が息吹に頭を掴みかかり、そのままゴリゴリとする。

「痛いから、それ結構マジメに痛いから！」

「仲良さそうね、あなたたち」

その間に新笠葵が優理たちの馴れ合いを見て入ってくる。

「優理……まさか、あなたに男が出来ていたなんて」

「だ、だから違うって葵。こいつとはそんな関係でもないし、昨日たまたま会っただけなんて！ それにここの転校生とかも知らなかったんだから」

「まあとりあえず、私も羨ましいから……優理ー私もいじらせろー！」

「混じるなー!!」

優理は葵にハグハグされながら、その手を息吹の頭をゴリゴリしている奇妙な図となっている。

すると、息吹は左腕に着けている腕時計をチラリと見たあとぱつと

優理のゴリゴリから簡単に抜け出して、そのまま席を立ちあがった。

「さてと俺は時間だから帰るね。またね、優理ちゃんと葵ちゃん」

「はっ、えっ？ ああ、じゃあ」

あまりの息吹に切り替えようとつさに優理は返事をしてしまう。

「しかし、変な子ね山神君って。優理、あの男はやめときなさいよ」

「だから、違うって言うてるでしようが」

優理も葵のハグハグを解き、立ち上がった。

「ねえ優理。このあと時間ある？」

「えっ？」

葵からの意外の言葉に優理は黙る。今までこの学校に入学して以来、葵にはそんな言葉をかけられたことなかったからだ。

「あ、葵。なんかあったの？」

「なによー、せっかく駅前に新しいネット喫茶できたから行こうと誘おうと思ったのに」

「ネカフェ？」

「そう、噂なんだけど店長がオカマらしいの」

『なにそれすごく気になる』

そのネット喫茶に優理はすごく興味心を抱いてしまった。

「わ、分かった。じゃあ2時間ぐらいなら……」

『まあFPSはしばらく休業しておこうかな』

ちょうど、優理は昨日のIBAとの戦闘でのショックがまだ立ち直れず、その葵の申し出は少しありがたいものだった。

二人は駅前に着き、少し古い雑居ビルの前にいた。

「ねえ、ここ？」

「うーん、聞いた場所では間違いなくこのビルだけど」

そのビルの古さに少し二人は躊躇している。

『確かにネカフェの看板【むーんらいと】って名前が書いてるけど』
『どうもネカフェというより怪しい飲み屋っぽい名前にまた二人の足』

は止まろうとする。

「ええい、ここは勢いよ。行くわよ、優理！」

「えっ、ちょ、ちよっとまって」

葵は意を決して、優理の手を引き、その雑居ビルのエレベーターに乗り込んだ。

「ふふ、優理。こうなったら後戻りできないわよ」

『こ、こいつ知ってて他の友達だと嫌だから私を巻き添えにしようとしてたんだ！ いやぁー！』

エレベーターが開いておそるおそる二人はその外を見ると、目の前には受付らしきカウンターがある。

『あ、案外ふつう……』

「あら、いらっしやい」

そう思ったのもつかの間、カウンターの脇から2mはあろうかという大男がオカマ独特の声の高さと口調で出てきた。

『ふつうじゃなかったー！！』

「いやー女の子のお客さんはお久しぶりだわ、しかも二人なんて。

ここは初めてよね、まずは会員登録しちゃうから」

この大男のオカマは会員登録の用紙らしきものを取り出して、ボールペンと共に彼女たち二人に手渡した。

「あ、葵。今からでも遅くないから……」

優理はちらりと葵の方を見ると、「えっ？ どうしたの優理」ともうすでに用紙を書き終えていた。

『は、はええよ。いくらなんでも！』

「まあ、せっかくだし入ろうよ。この人もなんか良さそうな人だし」「ええー……」

優理も諦めて用紙に記入する。書き終えて、その情報をパソコンに入力したあと「はい、これ持ってたね」とオカマの大男から【むーんらいと】とラメ文字で書かれたカードを渡された。

「次からこのカードを提示してね。初回は30分サービスで無料になるわ、5回入店でも30分サービスするからぜひ利用してね。じゃあ、あとお部屋のほうなんだけど、ちょっとお客さんも多いし、なぜか男の客しかないから……女の子が安心できるとしたら今ゲームプレイルームの方しか空いてないわね」

「ゲームプレイルーム？」

葵がその部屋について聞く。

「ええ、大部屋に仕切りはなくてゲーム用パソコンが数台おいてあるんだけど、ふつうにネットも繋げてるわ。ほんとにゲーム大会とかゲームのオフ会とかで使ってもらいたんだけど、そういうお客がなかなかね……今なら貸切状態よ」

「どうする優理？ 私は漫画読めればどこでもいいんだけど」

『葵は漫画読めればいいみたいだし、私もネットできればどうでもいいから』

「うん、そこをお願いします」

二人はその部屋で了承することにした。

「ああ、そうそう色々と案内が必要ね。ちょっと他の店員呼ぶわ」
そう言うとおカマの大男は首にぶら下げていたインカムを使い「ちょっとー案内お願いー」と店員を呼びかけた。しばらく待っていると、奥からやってきたのは見覚えのある男。

「あれ、なんでまたこんなところにいんの？」

そこ現れたのはラメ文字でむーんらいと書かれた黒いエプロンを着ている山神息吹だった。

「な、なんであんたここに！？」

優理は驚いて聞くと、息吹はおカマの大男を指差した。

「ここでバイトしてるの。それにこのおっさん、俺の叔父さんだし」

「お、叔父さん！？」

すると、いきなり叔父さんと言われたおカマの大男はその身長から予想もつかない動きでカウンターを乗り上げて「おっさんじゃねえ

とつただろうが!？ オカマだって何度言えりやわかる!」とドス聞いた声をきかせて、グーで息吹の頭を殴った。

『そ、そこ!？ ツツコムとこはそこ!？ オカマは認めてるんだ……』

「あらー二人共、この子のお友達だったのね。こいつちょっと変なガキだけど、二人とも仲良くしてね。そうそう、自己紹介しておく」と私の本名は山神勇雄^{やまがみ いさお}っていうんだけど、ここではアルテミスって呼んでね」

アルテミスと名乗るそのオカマは先ほどのドスのきいた声を直して、オカマ声に戻っていた。

「で、二人ともどうしてここに」

大きいたんこぶを作りながら、息吹は女子二人に聞く。

「いやあ、新しいネット喫茶が出来たと聞いて、そこの店長が珍しいと噂が」

葵が訳を言うのと「なんて物好きな」と返される。

「ほらほら、ここで話をしていると時間なくなっちゃうわよ。息吹も仕事。はやく二人を部屋に案内しなさい」

アルテミスからそう急かされるように息吹に仕事の指示をし「へいへい」と反応に答えて二人を部屋に案内した。

そのゲームプレイルームは一番部屋の奥にあり隠れるようにあった。

「んじゃ、飲み物は飲み放題、漫画も道中の本棚から好きなの取って。とりあえず2時間設定で時間になったらまたカウンターに来てくれ。他に御用は？」

息吹はパソコンの電源を入れると共にこのネット喫茶の説明をする。それが終わると「はい」と葵が手を挙げた。

「で、この部屋のところどころにあるポスターが気になるんだけど」

「ああー宣伝用だね。ゲーム会社の方から頼まれてるんだよ」

『な、なんでよりにもよってこんな場所で……』

それは優理がよく知るFPSゲームのポスター【コマンダーオブクロス】がその部屋に多く貼られていた。

「いちおうパソコンにもゲームがインストールされてるから自由にやってええよ。それじゃあ、ごゆっくり」

息吹はそういうと部屋から出ていく。

「と、とりあえず。私は漫画漁りにいくわ、優理はどうする？」

葵は優理にどうするのか聞いてくると「私はネット見てるよ」と答えた。

「そう、じゃあ行ってくるね」

葵も部屋から出て優理は部屋に1人となる。

「ネットといってもな、今はあまりコマクロには手出したくないし……そうだ掲示板でも見よう」

優理はそう独り言いうとコマンダーオブクロスの掲示板を開く。

「なにこれ!？」

そして、そのスレッドを見た直後、優理は驚愕していた。

#06 ネット喫茶むーんらいと（後書き）

とりあえずオカマを出したかった。

#07 かかってこいニート共 前編

優理はそのコマンダーオブクロスの掲示板に書かれた内容を見て、貧乏足を踏んでいた。

「なによ、これ。なんのよ」

そこには「戦火の皇女が敵前逃亡」などというスレッドが上がり「弱すぎワロタ」や「俺の方が強いw」などなど。あげくには「あいつのせいでチーム負けたわ」と自分のキャラが晒し者状態となっている優理は怒りに震えていた。これはたぶん昨日、IBAとの戦闘した時のことだろう。確かにあのあと居た堪れなく逃げ出した優理だったが、戦闘は序盤でその間の戦闘は優勢だった。

『あのとき、チーム負けたのは私のせいじゃないでしょ』

優理はあとになって、つい力っとなってしまったと思うだろう。あろうことか優理はそのスレッドに名前欄に戦火の皇女とし降臨してしまった。

「戦火の皇女とか呼ばれている者だけど、あれはIBAが変態じみた強さだから負けただけ。別に私の腕が落ちたわけではない。」とそうレスをした後、はじめは「嘘乙」や「おっさん仕事しろよ」と半信半疑だったが、優理は信じさせる為にあるレスを書き込んだ。

「今、部屋作るから来い。お前らの挑戦受けてやる。部屋名はかかってこいニート共にするから」

そのスレッドはそのレスの後にものすごい早さでレスの波が流れた。挑戦を受けて立つものの、観戦希望、荒らしレスなど1000までいきそうな勢いだった。

早速、優理は掲示板を閉じて、デスクトップに表示されているコマンドーオブクロスのゲームアイコンを押して、IDとログインパスワードを押す。

「頼むわよ。【揚羽】」

モニターにはハンドルネーム揚羽と表示されたキャラが映り、武器はいつものM4A1というアサルトライフルにグレネードランチャー装備を選択する。

「部屋名、かかってこいニート共。作戦はサーチ&デストロイ。先に4ラウンド取れば勝利」

優理が部屋を作る同時に部屋には満杯の人数が押し寄せてきた。

『ただけ暇人多いのよ……』

その勢いに少々呆れてしまう。

「すげ！ 本人だわ」

「キターッ！」

「マジかよ、釣られたクマーかと思ったのに」

入ってきた人の中にはボイスチャットを付けているのか、声が入り込んでくる。

『そういえば、ここにもボイチャ用のインカムがあるんだ。なんかネカマだと思われてそうなのも癪に触るし、声だけかけてみるか』
普段、優理はボイスチャットはしなかった。その理由は女の子であるのが分かると、急に出会い厨と呼ばれるゲームの中で恋の出会いを求めている輩が出没するからだ。その他にただのコミュ障という理由も含まれているのだが――。

しかし、こう集まってくれるとなると何か返さないといけないと思う義務感でインカムを借り、パソコンにつなぐ。

「来たわね、ニート共」

その言葉を放った時。

「女……だと……？」

声の音質の高さから判断するに全員がその場にいたメンバーがそう発した。やはり戦火の皇女はネカマだと思われるであろうである。

戦場は廃墟と化した遊園地。ここで優理たちは爆弾を仕掛ける側となり、メンバーは6対6になるように設定されるはずだった。

「よし……じゃあ行くわよ。あんたたち」

ついに戦闘が開始されると、優理は意気込みを入れて走るとそのあとを着いてくるものがない。

「あれ？」

そこでおかしいと思った優理は後ろを振り返る。そこには誰もいなかった。

「……あれ？」

優理と仲間となるはずだったメンバーは直前となって、そのチームを抜けていた。

つまり優理1対6という状況。すると、急に揚羽のキャラにメッセージが届けられた。

「バカでえ！ ふつうにやると思ってたのかよ。あんたも途中で逃げたんだ。そんな奴信用できねえだろ、だから他の仲間も逃げたってことだ。まあとりあえず、みんなにボコられるよ。それとニコヤカ動画で生放送中だから、ここでまた逃げたら晒し者だぜw」

そう書かれたメッセージを読んで、優理はプルプルと震えていた。

「堪忍袋の緒が切れたわ。お前ら、全員まとめてぶっ飛ばす！」

戦闘は優理が不利な状況のまま開始された。

「ついっばい漫画取ってしまったわ。重い……」
大量の漫画本を抱えた葵は部屋に戻る途中だった。

「……取り過ぎ、葵ちゃん」

それを見て空になったグラスを乗せて盆を左腕に上げながら持っているここでのバイト中の息吹が話しかけた。

「いやー、あんまりネット喫茶行かないから私。ついね」

「そういえば優理ちゃんは？」

「あの子はネットしてるって。そうそう山神君、優理はデリケートな子なんだからあんまりイジらないようにね、私以外」

「なんだよそれ。それにイジってないって、ただ昨日の夜になんか一人でさびしそうにしてたのを話かけたぐらいで……」

「はっ？ まさかそこを狙って……ドクペをかけた特殊プレイ！？
いやー！」

「だから、ドクペなんて俺かけてねえっての奢ってあげたぐらいで。じゃあ俺仕事だから」

息吹はその場を去ろうとすると「ねえ、山神君」と葵が引き止める。
「ん？」

「私から言うのも変なだけど、優理の友達になってあげてね。あの子、私以外あんなに話したの見たの山神君が初めてだったから」

「友達って。俺はもうそのつもりなんだけどなあ」

息吹は苦笑いしながら答えて、仕事へと戻っていった。

「敵、あと4！」

優理は苦戦を強いられていた。さすがに1対6という状況下だと一気に敵に攻め入られれば、退くしかない。それに敵も掲示板を巡回するような奴らだけあって、かなりの腕の持ち主でもある。それでもなんとか一気に二人を倒すことができ、残りの敵の数は4人となっていた。

「さすがに部が悪いな。各個撃破を狙うしかないけど……私が爆破する側だから時間過ぎたら私の負けだし」

目標の爆弾からはほど遠い位置にあるガレキの壁に寄りながら優理は相手の出方を探る。この戦場には優理が好物の車という爆発物は存在せず、あるのは狙撃ポイントとして絶好な止まった観覧車、ほぼステージの全域につながっているジェットコースターのレール、メリーゴーランドといったアトラクションの乗り物などが残された状態になっていた。

まず彼女は遠くにこちらを眺めるようにして立っている観覧車を隠れるようにして見ると、ゴンドラの中に1人スナイパーライフルを持った兵士が待機していた。

『やはりいるわね。となるとあとの敵3人が徘徊しているわけか』チーム戦となるとスナイパーは基本は一人となる、それはスナイパーは接近戦には不向きだという点と狙撃ポイントが限られてくるステージでは場所が被ってしまいお互いの邪魔になるからだ。

「二人相手だったら私にも勝機があるし、奴らは3人で隊を組んで確実に潰してくるはず。まずはそれをかく乱させないと……」

優理のキャラは服のポケットから四角い箱のようなものを取り出した。これはクレイモア地雷と呼ばれるもので相手が近づくと自動的に爆発する仕掛けになっている。彼女はそのままそれを壁の隅にまで運び設置する。

「……あとはこちらにおびき寄せるだけ」

敵に気づいてもらう為、観覧車のゴンドラにいるスナイパーに向かい一発の銃弾を放った。

「！」

その銃弾はさすがにかすりはしなかったが、そのスナイパーに場所を特定させることには成功したようだ。どんどん駆け足足音が近づいてくるのを優理には分かっていた。

すぐに壁を抜け出しダッシュで目標物がある方まで走る。もう観覧車からの死角の位置は網羅していたので、どうやら見られることもなかったようだ。そうすると、すぐに先ほどまでいた場所から爆発音が聞こえてきた。

ゲームメッセージには1人爆発死との報告。

「残り3！」

優理の狙いははじめから敵の殲滅ではなく、目標物の爆破だった。人数を削っていくことで爆破の解除されるリスクを限りなく少なくし、目標物からかなり遠い位置までおびき寄せたことで、爆破時間を稼ごうと思ったのだった。

敵に見つかることなく、なんとか走り抜け目標物を前にしてC4爆弾を設置作業に入る。

「よし、これで……ぐはっ!？」

そう思ったのもつかの間、後ろから一撃で敵に撃たれていた。

『なに、まさか一人が追い付いてきていた?』

しかし、その答えはキルカメラで確認されるとジェットコースターのレールの上から狙撃しているスナイパーがいた。確かにレールは全域にかかっている為に移動と視覚範囲が広いが、少し上に高い位置となっている為、登ったらすぐに敵に見つかるのでまず使わないものだった。だが優理は一人、偵察をするものが存在しないのでそのレールを伝って歩いてもバレる心配がなかったというわけだ。

「くっ、ふつうの場合でのみ考えていた。私は一人なんだ、敵だってその為に人員を用意しているはず。スナイパーは二人なんていう予想しておけるはずだった……」

「優理ー?」

その時、葵が大量の漫画本を抱えながら戻ってくるが優理はそれどころではなかった。

頭の中でどう戦っていくかとシュミレーションして作戦を立てていくが、どうしても自分がやられてしまう図が浮かぶ。

「あああーくそうー!!」

「ゆ、優理!?! どうしたの?」

『せめてあと一人いれば……』

葵が心配する中で第2ラウンドが始まりを告げた。

#07 かってこいニート共 前編（後書き）

かってこいベネット。銃なんて捨ててかってこい

#08 かかってこいニート共 中編

「ダメだ……やっぱりやられる」

優理は嘆く。第2ラウンドも向こう側の勝利を収め、もはや打つ手がなかった。

1対6という集団リンチに近いそのゲームプレイは無謀としかいえない。

だが決して優理は逃げるという選択肢が選ばなかった。

『ここで逃げたら、本当に負け犬になる』

「ううー……」

モニターの前で体操着の少女優理は不機嫌になると、いつも唸っている。

その後ろから覗くように見る息吹の陰がある。優理はその存在にまったく気づいていなかった。

彼が来たのは突然「優理が、優理がおかしくなった！」と葵からの通報を受けて何事かと思い、急いでこの部屋に確かめにやってきたら、モニターにかじりついている優理がいただけだった。

「まあ、確かにゲームで豹変する奴はいるとは聞いたことあるけど……女の子でこれはないわな」

息吹から見れば現在の優理は何か荒々しいものを感じた。

「しかし、この状況1対6とかいうのはフェアじゃないルールは俺嫌いだな」

彼はその部屋から抜けたあと店長アルテミスのところへ向かった。

3ラウンド目。もはや彼女には勝つ気力すら残っていなかった。

相手のチームは毎回2ラウンド目から4人全員で行動するようになり、まともにやりあえば返り討ちにされることは目に見え、そこを

突破しても徘徊しているスナイパーにやられる。変な場所で待っていると観覧車にいるスナイパーの的になるという状態。

「どうする……」

優理のキャラは戦場を見渡すと、止まっているメリーゴーランドに目に入る。

「メリーゴーランド……」

小さい頃、優理は一度だけメリーゴーランドに乗せてもらったことがあった。

「パパー見てみてー！」

「うーん、回転が速くなかなか撮れないな」

娘が木馬に乗っている写真をなんとか撮りたかった優理のお父さんだったが、回転しているのもありなかなか取れず別の子が乗っている写真ばかり撮れてしまっていた。

「そうそう、とうとう1枚も取れなくて、ようやく撮れたのは回転が終了した時だったっけ……そうか回転か」

このステージのメリーゴーランドはちょっとした仕掛けがあり、電源となる装置を作動させれば少しの間だけこれを回転させることができる。当初この仕掛けを発見した人はただの運営が遊び心で作ったものと思われていた。しかし、この状況であるとすればこれは利用できる。

優理はダッシュで走り、メリーゴーランドの電源を入れた。ギーコと混じりながら不気味な音楽を奏で、回りだしたそれはもはや子供の乗り物と呼ぶにはふさわしくない。

「これで何事かと敵は近寄ってくるはず」

彼女はそのままメリーゴーランドの台の上に乗り、一緒に回転しながら木馬の陰に隠れる。

敵は一斉に4人現れた。このメリーゴーランドに優理が乗っているのが分かると一斉にそこへ銃を乱射するが木馬の陰と回転もあって優理に当たることはなかなかない。

「私の番だ!」

回転する木馬の上からグレネードランチャーを連射する。

「や、やばい逃げるぞ!」

ボイスチャットから気づいた一人が声をあげるが――

「もう遅い!」

四方八方にバラ撒かれた手榴弾はメリーゴーランドを囲むように爆発していく。もはや敵4人は逃げ場がなく、ゲームメッセーじには4人キルと表示された。

「よし……これで残り2人」

メリーゴーランドも止まり、降りると遠くのほうでスナイパーがこちらに銃を構えているのが見えた。

「スナイパー!」

とっさに身を下げると、バシュンツと銃弾が通った後の音がする。

「くっ……」

この距離ではアサルトライフルでは仕留めるのに不十分だ。まずはこの場を退いて態勢を整えて、また攻撃に向かうとしようとしていた。だが、いつの間にか退いた先にはもう一人のスナイパーが立っていた。

『えっ!?!』

気づいた時にはすでに撃たれていたあとだ。

「こいつら、この戦法、聞いたことがある……」

優理にはコマンダーオブクロスの掲示板でそのことを何度か耳にしていた。

彼女の持ちキャラであるグレネードランチャーを連射する女キャラ戦火の皇女というように、有名プレイヤーにはその戦略にあった通り名を掲示板で各ユーザーから付けられる。その中で異質と言われたのは二人まとめて一つの通り名としているものたちだ。

彼らはいつも二人で行動し、1人が欺きの為に姿を前に見せてその攻撃を避けたとしても、後ろからもう1人がトドメを刺す。キャラの見た目も持っている武器もほぼ同じものだった為に彼らは掲示板から通り名として挟撃兄弟きょうげききょうだいと付けられた。

「さすが挟撃兄弟だ。戦火の皇女なんて目じゃねえぜ」

3ラウンド目も向こうの勝利を収めて、ボイスチャットでやられたメンバーたちはその兄弟に褒めると

「いやはや、たまたま上手く弟がトドメを仕留めてくれたお蔭ですぞ。」

「いやいや、さすがには兄者が前に出て囧になってくれたから拙者も安心して撃てたのござるよ」

優理は頭を抱えた。この声と独特なしゃべりに聞き覚えがあったからだ。

「ミ、ミリオタ兄弟か。そういえば掲示板見ているとか言ってたな……」

奴らの正体は優理が通っている台田高校の同じクラスにいるミリオタ兄弟だった。

「でも、これで3ポイント目を取られた……私にはもう勝てる要素なんて」

「諦めたらそこで試合終了だよ、優理！」

落ち込む優理を見て、モニターの外から励ましの声が聞こえた。振り向くと、そこに立っていたのは葵だった。

「なんだか分からないけど、負けそうなんでしょ？ でもそこで諦めたらもう負けなんだって、このバスケ漫画の安西先生が言ってる

し！」

葵は大量に持ってきた漫画本から有名なバスケット漫画をこちらに向けて応援なのか分からないような応援をしてきている。

「うん……まあ、どう考えてもこれ無理だよ……私一人という状況でどうすればいいのよ」

「大丈夫、優理。もう一人じゃないよ」
「えっ？」

優理の仲間チームにメンバーが加入していた。

その者の名は――

「I B A」

左腕に軍刀を持ち、軍服姿の男キャラが優理のキャラ揚羽の横に立っていた。

『な、なんでこの場所に？』

4ラウンド目が始まると、いきなりの予期せぬ加入メンバーに混乱したのか相手チームは連携を乱れていた。あっという間に敵はほとんどナイフでキルされていき、とうとう残りの挟撃兄弟だけとなっている。

「な、なんでここにI B Aあいびーえーがいるのでござる！？」

「ワタクシもそんな話聞いてないですぞ！？」

挟撃兄弟も混乱している状況でもそれでもいつもの陣形を乱していない。

だがI B Aは分かっていた。

「まずは後ろから片付ける！」

「！？」

ボイスチャットから声がする。その声は優理からすれば聞き覚えがあった。そして、その声はモニター越しからと同時にモニターの外から聞こえてきていた。その正体を確認する為に席を立ちあがり、

いつの間にかそのルームの中にある別のパソコンの席に座っていた人影を確かめに行く。

IBAは投げナイフを構え、後ろ側にポイと投げると同時に前に走り出す。

「はっ、そんな捨て身攻撃でワタクシの狙撃から逃げられませんぞ！」

囷となる前方にいた兄の方にあたるスナイパーはスコープ構えてトリガーが引かれる。

その瞬間にIBAは空中へとジャンプした。

「と、飛んだ！？」

スナイパーのライフルをギリギリ避けて、真正面からIBAは軍刀で挟撃兄弟の兄を突き刺した。

「ワタクシがやられても、トドメは弟が！」

「だから言っただろ。先に後ろから片付けるって」

「なっ！？」

ゲームメッセージにはもうすでに弟の方がキルされていると表示される。

「あ、兄者ー急にナイフが飛んできたでござるー」

「まさかあのときに投げたナイフは後方にいる弟に命中させたと！

？ アイビーエー……ワタクシたち以上の変態プレイヤー！？」

そのラウンドは優理側の勝利となり1ポイントを取っていた。

そして、優理はその陰にいた人物の正体を知り驚愕していた。ゲームから聞こえてくるボイスチャットと同時に優理に向かって吠える。

「俺の名はアイビーエーじゃない！ 伊庭八郎のイバ！ 隻腕の剣士だ！」

パソコンの前には片腕でキーボードを操作し、ヘッドバンに機械を取り付けている山神息吹がいた。

#08 かかってこいニート共 中編（後書き）

まさかの中編でした

#09 かかってこいニート共 後編

人はあまりの突拍子もない出来事が重なっていくと逆に冷静になれるものだ。

それがいきなり孤立して戦闘を行うはめになり、唯一の諦めかけた時に味方としてやってきたのが優理にとっては憎き宿敵IBA。そして、それを動かしているのが今日の前にいる突如として同じ学校に転校してやってきた右腕がないのにFPSを操作をしている男子、山神息吹だったとしても。

優理は静かに元の位置に座りなおした。

その行動に驚いているのは息吹の方だ。息吹自身も今までの敵で好敵手と認めていたのは優理が用いるキャラ揚羽だったのだ。そのいわゆる中の人と呼ばれるプレイヤーがこんな女の子だとは思っていなかった。

「ずいぶん冷静だな。FPSの熟練者っていうのはそういうものなのか？」

息吹は優理に話しかけるが

「冷静？ ふっ——あのね！ 誰でもこんな状況下で冷静に居られるわけないでしょ！？ だいたい元はといえば、あんたのせいでこんなことになってんのよ！ もうこれ以上、頭混乱するから余計なことは考えないでまずはこの目の前の戦闘をどうにかする方が先！ 分かった!？」

「は、はい……すんません」

彼女は鬼のような形相になりながら、息吹を睨みつけてマシンガンのような早口でまくし上げた。

「優理こわい……」

漫画本に顔半分を覗かせて、ボソツと葵が口をこぼす。

「だけど、これで形成逆転ができるわ。いい？　いくらあなたが変態を越えたド変態プレイヤーでも、この6人が一斉にかかれれば誰であろうとやられるに決まっている。ただそれが2人で組めば別。何人来ようが対処はできるはず。これから私が作戦言うから耳の穴かっぽじってよく聞くように」

「わ、分かったけど。なんか優理ちゃん、キャラ違くない!？」

「分かったなら、分かったなら私語は慎め!　あとはイエスには語尾にはマムを付けろ!」

「い、イエスマム!　ってサーじゃないの!？」

「それは男に対してだ!　私は女だよ!」

そこには息吹と葵が知っているはずの優理はいなく、まったく別人。しいて言えば兵士^{ソルジャー}がいる。

「やっぱ優理が怖いよー!」

その光景にガタガタブルブルと震えるしかない葵だった。

作戦が伝え終わると、優理のキャラ揚羽と息吹のキャラIBAは肩を並べて戦場に立った。

「よし、それじゃあ作戦通りに……じゃあ掛け声でもやっとく?」

「おう」

二人はせーのと一緒になって叫ぶ。

「かかってこい!　ニート共!」

息吹は優理の指示通りにまずは敵の方面と走り、優理は開始場所の近く壁に身を隠す。

IBAは戦場を駆けていた。まず最初は観覧車のゴンドラ内部にいるスナイパーの視界からは入らないように移動すること。

「見つけた、IBAだ！」

「1人でノコノコと。こちらは4人だ、先ほどは混乱していたがそうはいかねえ！」

「ここで戦火の皇女と噂のIBAを一辺に倒せばニコヤカ生放送も盛り上がるな」

「野郎ぶっころしてやらー！」

敵と出会ったら4人1組に組んでいる可能性が高いので敵う相手ではない――

「フラッシュバン！」

まずはフラッシュバンを投げて、引き返す。

「ちっ、待てー」

シヨックから抜け出した敵はそのあと全力で追ってくるはず。そこを優理が――

「いらっしやいませー！」

「げっ!？」

グレネードランチャーで出迎えた。

その状況にスナイパー二人は狙撃ポイントを離れて、いつものように挟撃作戦をしてくるはずである為にスナイパーの1人は観覧車のゴンドラには梯子を使って降りなければならぬので少しの時間が必要になることになる。

「ふう……あとは兄者に合流して――えっ?」

梯子から降りた弟は早速キルされていた。その正体はIBA、息吹だった。彼は敵を引き連れてあとに持ち前の駆け足で観覧車へのルートを迂回して走ってきていた。

「あ、あとは兄者が！」

弟がそう兄に無念を伝えると同時に

「はい、残念ー」

と優理が笑いながら揚羽が残りの1人となった兄の方を倒していた。

「よしやあああ！」

優理はパソコン乗っていたデスクを足でけり上げて、キャスター付きのイスを踊るように回転した。

「すごいな、優理ちゃん。あいつら優理ちゃんの予想通りの行動しかなかったぞ!？」

それを見て、息吹も驚きながらも優理と喜びを分かち合うように話す。

「ははは、これが戦略よ戦略。ハイタッチー」

「あ、ああ!」

優理がハイタッチを求めると、少し照れ笑いながら息吹は左手でタッチした。

「こらこら、イスで遊ばないの」

そこにこのネット喫茶の店長であり山神の叔父である山神勇雄もといアルテミスが様子を見にがてら、イスで遊ぶ優理を注意した。

彼女はその注意を無視するが、次のラウンドに備えてデスクに自然と姿勢を戻していた。

「まったく……息吹も困ったやつだけど、あの子も相当ね。あら、

君はあのゲームやらないのね？」

アルテミスは自然とその様子を見ているだけの葵が気になり話しかける。

「いえ、私はああいうゲーム、というか銃っていうものが嫌いなので……でも優理のあんな楽しそうな顔見るの初めてです」

「そうね……息吹もそうだったな。このゲームやる前に比べて、全然別人ね……」

「あの、一つ質問いいですか？」

「スリーサイズ以外なら何でも教えるわよ？」

葵は息吹に指を指し――

「優理は左手をキーボードで操作して右手でマウスを使って遊んでいるんですが、どうして山神君は左手だけで遊べるんですか？ し

かも、話を聞くとそうとう上手いみたいじゃないですか」

「ああ、それはね。彼の頭に付けているのが秘密よ」

「えっ、あのヘッドバンみたいなのですか？」

確かに息吹の頭には何か機械を備え付けたヘッドバンらしきものを頭に巻いている。

しかし、葵にとってみればそれが何の関係があるのかまったく予想がつかない。

「あれはね、いわゆるブレインマシンインターフェイス。つまり脳波を電気信号としてキャッチし、データとして送る機械のことね。彼はその脳波を使ってFPSの中でいう照準というものをコントロールしているのよ」

「そ、そんなことが可能なんですか？」

「それを可能にしてみたのが私の甥なのよ。普通なら相当の修業必須とまで言われる。だけど、右腕が無くなった執念がそれを生み出したのかもしれない……」

「彼は生まれつきのものじゃないんですか!？」

葵は驚き、アルテミスは目を丸くした。

「あらそう、じゃあまだその話をするほど、まだあの子は心開いたわけでもないのね。その話はたぶん私からは絶対話せないわ、あの子が話すまでね」

葵は真剣にモニターを見て、必死に左手をキーボードを走らせる姿を見つめる。

『急に右腕が無くなった？ 一体何があったというの山神君は』

優理たちは次の2ラウンドも勝利を収め、いよいよ敵とは同点にまで追いつめる。

「優理ちゃん、次の作戦は!？」

敵もバカではない次も前の戦闘のように息吹が敵を引き付けるとい

う作戦は通用しなくなるだろう。そこで優理に次の作戦を聞いてみたいが――

「……」

ただ優理は黙っている。

「お、おい。優理ちゃん？」

「作戦？　ねえよそんなもん」

「は、はっ！？」

先ほどまで戦略とかいって喜んでいた優理とはまた別人の人物がそこに座っている。

「もう最後は総力戦よ！　ヒャッハー！　汚物は消毒だー！」
ラウンドが始まると同時に揚羽は走り出す。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！？」

それに続けてIBAも走ると、向こうからのボイスチャットも
「ウラアアアアー！」

全員声合わせて、敵も全力でこちらの方へ走ってきた。

「いやだ……なにこの戦場」

「吹っ飛べやおらー！」

息吹はもう何がなんだが分からないでいた。今までの戦略とやらどこに行ったのか……息吹は肩を落ち込んでいると――ポンツと肩に手を置かれた。

「あと、頼んだわ」

キャスター付きイスで優理は息吹に肩に手を置いたあと白くなるように燃え尽きていった。

「ああ、限界だったのね優理」

葵が間に入ってくると「じゃあよろしく山神君」と優理を引き連れていった。

モニターに目を戻すと、先ほどまで暴れまわっていた優理のキャラ揚羽はとつくに力尽きている。

そして、残りの数は3……。

「ふふふ、残りはI B A、あなただけですぞ」

「覚悟するでござる」

「ウラァー！」

敵はどうやら挟撃兄弟二人と残りアサルトライフルを持った1人がI B Aと迫ってきている。

「1対3ですか……無茶難題を押し付けるね、優理ちゃんは」

息吹はモニターに集中すると眼光がするどくなり、それを見た葵がなぜか身震いをした。

『な、なに？　一瞬で空気が変わったよ？』

「ウラァー」と銃を乱射しながら攻めてくる1人をまずは投げナイフを投げて仕留める。

「そこでござる！」

挟撃兄弟の弟からのスナイパー攻撃を華麗に避け、一発づつしか撃てないボルトアクション式のスナイパーライフルだった為に撃つのはラグが生じる。そこを突かれて、一気に間合いを詰め、I B Aは軍刀を抜いて切り倒した。

「む、無念でござる……」

「弟よ！　うおーー！」

仇を晴らすために次は挟撃兄弟の兄がスナイパーライフルを捨てて、別に持っていた副武装であるハンドガンを取り出して突っ込んできた。

「もうあなたには投げナイフも軍刀を使う隙ありませんよ！」
このままでは確かにI B Aはハンドガンの銃撃でやられる。だがも

う息吹にとっては予測できていて、その対処にはもう準備ができていた。

ハンドガンの銃撃を飛びながらスライディングで避けて、最初に倒したアサルトライフルの男に着く。

男から刺さった投げナイフを抜いて回収し、それをそのまま兄の方へと投げた。

「……完敗です」

挟撃の兄は悔しそうに、だが少し嬉しそうに崩れ落ちていった。

そして、この戦闘の勝敗が決するのだった。

#09 かかってこいニート共 後編(後書き)

寝過ぎして、いつもの投稿時間過ぎました。ごめんなさい。

#10 隻腕のナイフア

ニコヤカ生放送で放映された優理たちの戦闘映像は多くの反響を呼んだ。

そして、優理と同時に参加してしまったIBAこと山神息吹もまた掲示板にスレッドが立てられたのはもはや時間の問題であった。

「やっぱりIBAの話題ばかりね、ていうかアイツに対しての挑戦状ばかりだわ」

ネット喫茶【ムーンライト】から帰宅した優理は自宅のパソコンからコマンダーオブクロスの掲示板を眺めていた。やはりスレッドにはIBAのことに關しての事柄ばかりだ。しかし、その中で優理の目に止まるものがあった。

「IBAの通り名決め？　へえ、通り名決めてるんだ」

コマンダーオブクロスの掲示板には凄腕プレイヤーなどの通り名を決めるスレッドがまちまち立てられることがある。優理自身も前にこうしてグレネードランチャーを乱射して活躍したところから戦火の皇女という通り名が付けられたように今回、生放送でのIBAの活躍を見た者たちが早速通り名を決めるようだ。

『にしても、ロクなのないわねー』

通り名決めはまずはほとんど各個人たちが考え出した通り名を発表していき、最終的には人気投票のように集計をする。もちろんこれは通り名を付けられる本人も投票ができるが、その意思とは関係なく決まることが多い。

「私はグレネード娘はあとに選べることなくて良かったわ……」

掲示板には時にセンスを疑うものが多く出る場合がある。それが匿

名ならでは恐ろしさでもあり、おもしろさでもあるのだが――今回もそのセンスが飛び交っていた。

「ズバツと刺殺男とかないわね……戦場のサムライもなんかありきたりねー」

どうもイマイチ、優理にはピンとこない。

「そういえばアイツ。IBAは伊庭八郎のことだとか何とか言ってたけど……誰よそれ」

生放送の動画にも確かに彼、山神息吹の口からその言葉が発せられていた。

優理はまずネットの検索で伊庭八郎について調べると多くの件数がヒットした。

「多過ぎ。ええとウィキペはつと。うーん、幕末の剣士……隻腕の――」

伊庭八郎とは江戸時代に生まれたその時代有名な剣道場を開いていた御曹司。小田原藩士、高橋藤五郎に左手首の皮一枚を残して斬られ為に左手は不自由となった。以降、隻眼の剣士として知られる。

「なるほどね……アイツ自分に例えてんのか」

葵から優理は山神息吹の話を後から聞いたことによると、彼は先天性のものでなく後天性の右腕の障害を負ったものということが分かった。しかし、その理由はどうしても息吹は話そうとしなかった。

「まあそんなに興味はないし……そこまで仲良くなった覚えもないしね。それより通り名を――」

優理は伊庭八郎の隻腕の剣士という名称にピンと来た。

『これだ』

早速、優理はキーボードでカタカタと打ち込み、その通り名を決めるスレッドに書き込んだ。

次の日、優理は学校に登校すると先に隣の席には山神息吹が眠そうに机にもたれかかっていた。

「ずいぶん疲れてるようね」

優理はその様子を見てなんとなく話しかけると、ビクツと驚いたように息吹は身体を動かして、むくりと左手で支えて起き上がる。

「あのあと、おっさんに「仕事中心ゲームしたんだから、夜勤に入ってもらおうわよ!」とか言いやがってさ。まったく……眠くてしょうがない」

「そ、そう……」

優理には少し罪悪感が芽生えていた。その原因を作ったのは己でありながら、息吹はあまりそれに怒っている様子が無く、ますますその罪悪感は増長させる。

「そうそう、そういえばアンタの通り名決まったから」

「なに……通り名って?」

この様子では息吹は掲示板は見えないようである。コホンツと声を整えて優理は発表する。

「隻腕のナイフアー。これが今度からアンタの通り名よ」

「はっ?」

気の抜けた声でまったく意味が分からないような発言をする息吹。その言動に少し優理は怒った。

「アンタね、通り名よ? これでコマクロでは有名人物の一人と数えられるようになったの。世界中で遊ばれているこのゲームでそれは名誉あるのよ」

「め、名誉ってたかがゲームで大げさな」

「たかがゲームですってー!」

FPSゲーマーである優理にとって、たかがゲームという発言はも

はや禁句ものだ。しかし、その発言をするあたり息吹にとってはあまりあのゲームへの執着というものが存在していないものが優理は分かる。

「ま、まあいいわ。んで、これからアンタはこれ以上に多く挑戦者が現れるようになると思う。前回は私への標的で1対6なんてされたけれど、これからはアンタ自身にそれをやられる可能性があるはずよ」

「ええー、別にそんなの逃げればいいじゃんー」

「アンタが逃げたら、アンタに負けた私の株価が下がるの！ それで昨日の夜に思いついたことなんだけどークランを作ろうと思うのよ」

「クランって、確か固定チームだっけ」

クランとはFPSゲームにおいて部隊のような集団を作ってしまうこと。このクランを作ると、クラン同士で対戦したり、公式でたびたびに行われる大会に出場することができる。そして、コマンダーオブクロスにおいてクランに加入しているものはクラン単位でしか挑戦することができないという暗黙のルールが存在している。

「そう、そのクランに私とアンタが入れば簡単に個人からの挑戦をすることができない。昨日みたいなことも早々起こらないってわけよ」

「でもそれで二人だけの部隊ってさびしいというか、優理ちゃんはそれでいいのかよ」

「良いわけないでしょ！ これはアンタの友達増やすことが出来るっていうメリットもあるのよ」

「……マジかよ、入るわ」

そのような特典内容を優理は話すと息吹は即答で了承していた。しかし、優理自身もそのメリットが一番の目的だった。彼女もそのク

ランを使って同じ趣味を持った女の子の友達がほしいと思っていたからである。

優理は片手で手のひらを見せるように前に出した。

「最低でもクランとして一般に認められる人数は5人。これでクラン戦や大会への出場条件にもなっているの。まずはそれだけの人数を集めること。あ、それと――」

優理は談笑しているミリオタ兄弟たちを見て、一言――。

「あの二人はダメよ。まず見た目からして他の子が引く。そして、あの二人は私の作戦通りに絶対動かないし、なんせ挟撃兄弟と言われているぐらいなんだから片方欠けると大した戦力にもならないわ」

「ずいぶん厳しいな」

「まあね。でも集めるからには強いのが入りたいけど、そうね、まずは手近な子を入れましょうか」

「手近な子って？」

息吹は聞くと「そろそろね」と優理は時計を見た。ガラッと教室の戸が開かれると――

「優理ーおはよー!」

と優理に抱きつこうとしている女の子、新笠葵だった。

「確保ー!」

「えっ?」

彼女は逆に抱きつこうとしたのに逆に優理に抱きつけられた形になっていたことに驚く。

「何、何?」

手近な子の正体がわかると息吹は「ハァー」とため息をついた。

#10 隻腕のナイフア―(後書き)

早め短めに。これで1章終わりです。次回から2章

1章までの登場人物（前書き）

ネタバレ的なこともありますので、まだ1章を見ていない方は先に1章をお読みください。

1章までの登場人物

#1章までの登場人物

・日可部優理 ひかべ ゆうり

公立台田高校に通う高校2年生の15歳。コマンダーオブクロスはR15指定だが、中学時代にもやっておりプレイ歴は2年となる発売初期からのベテランプレイヤー。

見た目は新笠葵曰く、身長と特徴的に市松人形みたいな外見らしい。キャラの名前は揚羽。あげは

M4A1というアサルトライフルが特にお気に入りで、その中でもグレネードランチャー装備を好む。

グレネードを乱射して多くの爆発で敵を吹き飛ばすことから戦火の皇女という通り名が付けられた。

※FPS照準速度——68%

・山神息吹 やまがみ いぶき

東京から台田高校に転校してきた15歳。右腕を2年前に失い、1年前に左腕のみで生活できるレベルになった。右腕を隠すように学生服を羽織っていることが多いが、本人曰くサプライズの為。

あまりにも差別的なことには傷つくらしいが、その割には自分の身体を使ったブラックジョークが好き。

コマンダーオブクロスではマウス操作をする失った右腕の代わりに脳波を使った特殊のコントローラーで照準を動かす。

キャラの名前はIBA。隻腕の剣士、伊庭八郎から由来。

最弱ネタ武器といわれた軍刀を使い戦場を駆け回り、IBAという名から隻腕のナイフアームという通り名を優理の案から本人は知らずして付けられた。

FPS照準速度――??%（脳波を使っているので測定不能数値）

にいがさ あおい
・新笠葵

台田高校の高校2年生。誕生日は4月と早生まれで本編では16歳。優理とは背丈も胸も差があり少し染めているのか茶髪。優理を妹か市松人形としてかわいがっている。優理には友達が自分しかないということを知っている為、山神息吹には最初厳しい目線で見ていた。

銃というものが嫌いで、同じクラスのミリオタ兄弟を毛嫌いしている。

やまがみ いさお
・山神勇雄

山神息吹の叔父であり、優理たちの住む街の駅前の雑居ビルにあるネット喫茶【むーんらいと】の店長。

愛称アルテミスと名乗っている。由来は月の女神というギリシャ神話から。

身長2mはあろうかの大男ながら、趣味は料理にお菓子作り。山神息吹に脳波コントローラーを授けた人物でもある。

過去の職業に大きな秘密が――。

・ミリオタ兄弟

台田高校、優理たちと同じクラスで銃の話ばかりしているメガネをかけて太った男子学生2人組。

外見も似ていて兄弟と言われるが実はまったく関係ない赤の他人である。

兄は一人称ワタクシ。弟はサムライ口調で区別ができる。

山神息吹に弟を伊藤と間違われていたが、本名は違うらしい。

コマンダーオブクロスで挟撃兄弟きょうげききょうだいという二人で一つの通り名で、その名の通り挟み撃ち攻撃を得意とした戦法で日可部優理のキャラ揚羽を苦しめた。

ちなみに彼らの名前が決まっていなのはほぼモブキャラ扱いだからである。

F P S 照準速度——55%（二人共通）

・日可部優理の母

日可部優理の母。娘、優理が部屋に籠っていて突然叫び声をするこ
とになにやら心配している。

※F P S 照準速度は平均50%

#11 新兵 葵

「えっと、つまり私にあのゲームをやれと？」

優理に捕まった新笠葵はその理由を聞く。しかし、それを見て息吹は疑問に思っていたことがある。

『彼女は確かあのゲームをしたことがないはずだ。それで強いメンツを入れないなんて』

優理は前に克蘭を作りにあたり、同じクラスにいるという挟撃兄弟もといミリオタ兄弟でも非じゃないほどのメンツを入れると言っていたあたり彼女の思考とはまず矛盾している。

「アンタ、疑問に思ってる？」

「ちょ、ちよつとどこ掴んでるの優理!？」

優理はあろうことか葵の丰满なバストを揉みながら疑問に思っている息吹に聞いてくる。息吹はそれを『ありがたや』と心に思いながら仏様に感謝するように拝んでいた。

「ちょ、山神君まで!？ い、いい加減に離してー」

「まあいいじゃない減るもんじゃないし、まあ増えるかもしれないけど……。まあいいわ」

パツと優理は葵から手を放すと葵はハアハアと呼吸を整えていた。

「葵を選んだのは他でもない。どんなことでも少しの練習期間で彼女はプロ顔負けの何でもできる完璧少女なのよ。そして、それと同じ時に――」

彼女は一言、間を置いたあと机に出していた筆箱から消しゴムを取り出して、あろうことか呼吸を整えていた葵にそれを投げた。

「っ!？」

頭めがけて飛んできたそれを、葵はすぐに受け止めている。その光景を目の当たりにして息吹も納得した。

「なるほどな。ほとんどのアクションゲームにおいて重要なのは反射神経。葵ちゃんにはそれがいわゆるニュータイプ並にあるんだ」

「まあもつと正確に言うとうと、その反射神経と同時に空間認識能力がずば抜けて高いのよ」

「空間認識能力？」

息吹は聞いたこともないその能力名に?という顔をしている。

「そうね……たとえば玉入れというものがあるわね」

「ああ、運動会のあれな」

玉入れ、その名通り高い位置に設置したカゴにボールを入れていく競技のことだが。

「彼女はそれを百発百中で投げ入れることが可能なのよ」

「はっ!？ ふつうにすげえ!」

「えっ、そうなの?」と葵は呼吸を整えると優理が投げた消しゴムを彼女の机の上に置いた。

「もうひどいよー優理。それにあのゲーム、私はしないよ? 銃なんて野蠻で嫌いだし」

ぐちぐちと言う葵にしびれを切らしたか、優理は下に俯いた。その様子を見て葵は「えっ、優理?」としどろもどろになる。そして、泣き声で――

「どうしても……ダメ?」

と身長が低く、涙で少し潤った瞳の優理は何か一種の小動物的なかわいさのオーラが出ている。

「はう!」

優理はそれを見て、我慢できなかったのか抱きしめてしまい「お姉ちゃんに何でも任せない！」とそのオーラに負けていた。

『魔性の女や……こいつ』

息吹は葵に抱きしめながらも優理がニヤリとした顔を見ていた。

放課後、優理たちの3人はネット喫茶【むーんらいと】へと向かった。息吹はそのままバイトであり、優理は葵をゲーム世界で訓練する為にパソコンを近くで操作する必要があった為、必然的にあのゲームプレイルームの部屋に入っていた。

「で……私、こまんだーなんだらっていうよく知らないんだけど、一体どういうゲームなの？」

葵はFPS系統のゲームを触ったことないまったくの初心者。彼女に優理は一からこのゲームの内容を教えてあげる必要があった。

「まずこのゲームの名はコマンダーオブクロス。略してコマクロと呼んでいるの。このゲームの世界は第三次大戦がもし架空に起きたらという設定でプレイヤーは兵士となって、その戦争を勝ち抜いていくゲームよ。武器は実際の戦闘で使われた兵器などを忠実に再現^{リアル}していて、もし現実^{リアル}に新しい兵器が開発された場合、それを随時バナージョンアップしていく細かさ。それがキツカケで世界中で大ヒットしたのよ」

「へえー」

優理は熱心に説明するとは裏腹に葵はあまり興味を持たなさそうな返事で返す。そのことに優理はむっとしたが我慢我慢とパソコンにインストールされているコマクロを起動した。

「初期プレイだとまずはキャラメイキングから。自由に自分の分身となるキャラを作っていくのよ、ここはまあ適当に任せるわ」

「あ、結構細かく作れるんだねー。よーし！」

そこは興味を持ったのか、葵は一生懸命にマウスを動かしてキャラを作っていく。

――10分後。

「ま、まだ？」

「もうーちよっと」

あまりにも葵はキャラを真剣に作りすぎている。それに時々優理の顔を見ては画面に顔を戻す葵の行動に我慢できなくなり、優理は葵のキャラを横から覗き見た。

「……これ、私よね」

「あ、やっぱりわかるー？ 私も分身だったら優理みたいなかわいい子がいいからさ」

『私より身長高くて、胸がでかい、容姿も良いあんたに言われたら嫌味しか聞こえねえ……』

「……なんか嫌だから変える」

「ちょ、せっかくがんばって作ったのにー！」

優理は何か許せなくて葵が今まで作っていたキャラの設定をかえて葵に外見似ているキャラをあつという間に作り上げた。

「そしたら次は肝心の武器を選ぶことになるんだけど」

「いやだ」

「えっ？」

「銃はいやだ！」

葵はこのゲームの最大の特徴ともいえる銃という武器の所持を拒否する。

「葵、どうしてそこまで銃が嫌いなのか？」

葵のそこまで銃に対する毛嫌いさが分からなかった。確かに女の子であれば、嫌いという理由もわかるが、葵のは少し異常だ。その理由を優理は少し聞き出そうとすると、少しためらっていたが口を開いた。

「ねえ、優理。銃で撃たれたことってある？」

「そ、そりゃないけど」

「私はね、前に父とアメリカで射撃場に連れて行ってもらった時に事故で弾が跳弾っていうの？　それが私の足目掛けて跳ね返ってきたの。そのあとすぐ手術。あのときはほんと大変だったわ」

葵からそんな話を聞いたのは優理は初めてだった。きつと思ひ出したくないトラウマなのだろう。

「ごめん、葵。そんなこと知らなくて、それがトラウマで……分かった」

優理は銃以外の武器を持たせることにした。しかし、このコマクロにおいて銃以外の武器というものは二つしかない。一つはIBAこと山神息吹が使う軍刀。これは玄人用であり、息吹ほどではなければ使いこなせない。そして、もう一つの武器というものが――

「ええと、これよく映画でも警察が持っている盾よね」

画面にはよく暴徒鎮圧などに警察などが持っている透明な盾――ライオットシールドが表示されると優理が説明をする。

「そう、これはライオットシールドね。こういうゲームにおいて珍しい防衛系の武器で、これで銃弾などを受け止めることが出来る。空間認識能力と反射神経を兼ね備えた葵にはピッタリの装備よ」

「……確かにこれなら銃を使わなくてもいいけど、でも肝心の攻撃ができなくない？」

葵の疑問に言うとおりの、このゲームは極端に言えば敵を倒すゲームであり、盾では人を倒せることができない。

「そして、次はこれ……フラググレネードよ」

次に優理は画面を進めると、フラググレネードという装備を選ぶ。そこには緑色の玉のようなものが出てきた。葵もハリウッド映画などでこの存在はよく目にしたことはあった。

「手榴弾ってやつね。爆発するんだよね、これ」

「そう、これのピンを抜いたらだいたい爆発まで5秒かかるわ。その間に敵に投げ入れるのよ」

「へえーなんか玉投げみたいだね。これはおもしろそう」

「結局、葵ちゃんもハマりそうだな」

ラメ文字でむーんらいとと書かれた黒いエプロンに左腕でクッキーの乗ったお皿のお盆を持った息吹が会話の間に入る。

「あつ、バイト終わった？」

優理は笑顔で息吹にバイト終わりが聞くと――

「まだ始まったばかりだったっうの。それより、これおっさんが持ってたけて」

「あ、クッキーだ」

葵が嬉しそうに手を伸ばして食べると「美味ーい」と口いっぱいに頬張っている。

「へえ、葵ちゃんはクッキーが好きなのか」

意外な好物に息吹は驚くが優理は知っていらしく「葵は甘いものならなんでもいいのよ」と言った。

「さ、葵。最後の仕上げに名前よ、名前」

「名前かーあ、そうだー」

カタカタと葵はキーボードをゆっくりと打ち込んでいく。

「優姉」

と。

#11 新兵 葵（後書き）

ちなみに兄も射撃訓練場で跳弾受けて手術の経験あります。

#12 ピースメーカー

「な、何よ優姉って」

優理はあまりの葵のキャラネーミングに少々呆れていた。そして、その意味もなんとなく予想ができる。

「優理の姉、略して優姉って呼ばれたくないじゃない」

「いつ葵が私の姉になったのよ……まあいいわ、とりあえずこれでゲームが進められるわね」

優理は自分のイスの方に座り、パソコンにあるコマクロを起動した。

「さてと……俺は仕事が残ってるから、もう行くわ」

クッキーが乗っていたお皿を渡し終えたお盆を左の腋に絞めながら、息吹はゲームプレイルームから出る。

優理はそこで息吹に「休憩になったら来なさいよー」と声をかけると後ろを向いたまま左手を小さく上げた。

「優理ーまずはどうするの?」

ボイスチャット用のインカムを取り付け終わった葵は優理に説明を求めた。

「そうね……優理ってキーボード操作って慣れてる?」

「うーん、あんまりかな……?」

『なら普通にキーボードプレイはしない方がよさそうね』

優理は考えながら、この部屋の隅に置かれているカゴが目に入った。その中にはPCゲーム用に使うゲームパッド、いわゆる通常のゲーム機器のようなコントローラーが大量に入っている。

「よし、これなら葵にも簡単に操作できるわね」

葵のそれをパソコンに繋げ、ゲームの設定をいじってコントローラーでもプレイできるように設定した。

「ああ、これなら家のゲームでも感覚似てるからやりやすいかも」

優理は葵が別段ゲームをやらないのではなく、銃が出てくるアクションゲームなどはやらないという話を聞いていた。ならば普段ゲームをやっていたことはあるのだろうと分かっていた。

「よし、それじゃあ、まずは実戦あるのみ！　とりあえずチーデスチーデス」

「チーデス？　チーズかまぼこみたいなもん？」

「そりゃチーかま。チーデスマッチっていうルール略よ。まあ葵は盾で防御してればいいから」

「な、なんか緊張するね」

葵はコントローラーが握る手がすでもう汗ばんでいた。はじめてやるゲームというものにはドキドキ感でそうなる場合はあるが、葵の場合は銃が出てくるというトラウマ要素のが大きく冷や汗的な意味での汗ばみだった。

人数もすぐに集まり、優理と葵は同じチームに所属される。戦場なのは西部劇を連想させるウエスタンエリアだった。ここには壊れた馬車や家の陰木箱ぐらいしか盾にできる物が少なく、撃ち合いが盛んな戦場でもある。まさに早撃ち勝負のメッカなこの場所はすぐゲームの試合が終わりやすいことから比較的に人気が高い。

「ここで葵の盾が重宝するわ。葵がまずゆっくりと前へと前進、そこは私が隠れながら撃っていく。まずはその訓練よ」

「わ、分かった。とりあえず前に進むだけでいいのね？」

作戦が開始されると同時に葵は前に乗り出す。

「きゃあ！？」

それを狙ってか、向こう側にいる敵は葵の方へ全力で集中攻撃をして葵のキャラ優姉の持っている盾にはバシバシと銃弾をくらう為にヒビが入っている。

葵のコントローラーを握る手が一層汗ばむが、優理のキャラ揚羽は

その後ろに続いてM4A1のトリガーからグレネードランチャーの方のトリガーに装備を変える。

「そこじゃー！」

揚羽はそのグレネードランチャーを敵側に撃ち込み、敵は5人ほど吹っ飛んだ。

「す、すごい！」

盾越しにその爆風を感じながら葵が静かにつぶやく。モニター画面上にある先ほどまで00と数字が表示されたのが05へとカウントされていた。これを先に100カウントした方がそのチームの勝利となる。

敵は先ほどのグレネードランチャーを攻撃を見たか、優姉に対しての攻撃は比較的弱くなり、壊れた馬車の陰に隠れていた。

「よし、敵はだいぶひるんでいるわ。ここは一旦味方に任せて下がりましょう」

優理の考えていたのはあとの敵は味方がチマチマと削り削られながら戦っている。あとは持久戦に持ち込めれば自動的に5人も倒したこちらが有利となる戦法だった。

「い、意外と考えてるんだね優理って」

「まあね！」

明らかに葵は学校で見る優理と印象が違う。このゲームに触れている優理は本当の意味での優理の姿が見えていた。

『私も出せるのかな……本当の自分』

「どうしたの優理？」

はっと優理の声に目が覚めたように葵はモニターに集中する。と、急に向こうから何かの気配を感じた。

「優理！」

即座に優理の前に出て、盾を構えると予期した通り銃弾が当たっていた。

「へえ……やるじゃない」

渋いおっさんのような人物がはくボイス、チャットから聞こえてきた。

「ふむ、戦火の皇女のあとを追ってみれば目当ての人物会えると思ったが……なるほど、なかなかの腕前の盾使いもいたもんだ」

そこには優理たちの前にはカウボーイハットを被った、ヒゲヅラのおっさんキャラが立っていた。

「な、なにこいつ」

葵が疑問に思っていると、そのおっさんは両腰のホルダーに納めていた2丁の銃を取り出した。

「あれはコルトシングルアクションアーミー……」

その銃の種類だろうか、優理はボソツとモニター越しにその名を口にした。それはよくある西部劇の装弾数6発しかないリボルバーだ。おっさんはそれを両手でくるくると回して、またホルダーに戻した。

「おー……!」

ゲームの中なのになぜか葵はそれを見て思わず拍手をしてしまったが、優理はそれを見て冷や汗をかいているように見えた。

「ゆ、優理？ おトイレなら我慢しないほうが？」

「そんなんじゃない!」

優理は怒鳴るような声を言い出しながらイスから立ち上がって、手をデスクに置いた。

「なんでこいつが……なんでこいつが……!」

「落ちていて優理! 一体このおっさん何者?」

一瞬間を置いたあと、プルプルと身体を震えながら静かに優理は口にした。

「通り名を狩ることを趣味とした賞金首稼バウンティハンターぎと呼ばれる者……。そ

の中でもトップの実力を持ち、持っているその二丁拳銃シングルアクションアーミーの通称ピースメーカーからダブルピースと呼ばれる男よ」

「だ、ダブルピース……そんな恐ろしい奴なの？」

シーンと部屋全体が静まりかえると、その静寂を消すかのように聞き覚えのある男子の声がした。

「は？　アへ顔ダブルピースどうしたって？」

優理たちの傍にいたのは仕事の休憩中か息吹がいつの間にか立っていた。

「お前、それ私が言わないようにしていたのに何で言っちゃうんだよ！　せっかく笑いこらえていたのに！　くっ……はははははは！」
いつの間にかその発言をしていた息吹に対して優理は怒りながらも笑っている。

どうやら彼女はその笑いを抑えるために怒るようにして身体を振るわせていたようだ。

「いや、女の子。しかも女子高生がその単語知っているってどうなのよ、優理ちゃん」

「だ、だって……おっさんキャラなのにダブルピースって……！　くっはははははは！」

葵はその優理の行動の意味不明さに口が開いた顔をしていた。

「ほ、ほら。葵ちゃん意味分かってないんだから自重して自重」

「……てめえら、黙って聞いてりゃ好き放題いいやがって！」

いつの間にか、ダブルピースにはボイスチャットから声が漏れていたのか、先ほどのやり取りを全部聞かされてしまい、激しくまた二

丁拳銃をくるくると回し始めた。

「ご、ごめんね、ダブルピース。でもおっさんでそのネーミングはちょっとネタしか思いつかなくて、掲示板のネーミングセンスにはやっぱり疑うものがあるわ……くくくくっ」

優理は笑うのを我慢しながらダブルピースに話しかけるが、もはや怒りを浸透していたのか、それを聞かずしてすぐさまリボルバーを優理に向かって突き付けトリガーを引く。

「優理、あぶない！」

それをいち早く葵は反応し、その銃弾を防いだ。

「ふっ、なるほど。なかなか良い反応をしているな。だが、これはどうかな！」

「!？」

しかし、続けてダブルピースは銃を放つが、その向けた先は二人どころとも狙っていない場所、地面へ弾丸は飛び出した。

「葵、避けて！」

優理が叫んですぐさま葵は反応し盾を構えたが、その銃弾がどこから来るのか分らない。しかし、葵のキャラはダメージをいつの間にか食らい、その場に倒れていた。

「えっ……これは見覚えが……うっ」

葵はその正体に気づくと共にすさまじい息切れを覚えていた。

#12 ピースメーカー（後書き）

お待たせしまして申し訳ないです。

#13 ダブルピースとの戦闘

「うっ……」

「葵！」

優理は葵の様子を見ると、頭を抱え込んで苦しそうに息が荒い。なぜ彼女がこんな状態になったのか、優理はすぐに分かっていった。

「今の攻撃、跳弾を利用したわね」

葵は過去に跳弾の事故をくらったことがあり、それがトラウマになっている。

「優理ちゃん、とりあえず俺が葵ちゃんの介抱しておくから！」

息吹はすぐに葵のそばにかけより、モニターから離れた。

「ははは、どうよ。オレの跳弾攻撃は。これなら簡単に弾道予測はできない」

ボイスチャットからその様子をまったく知らないダブルピースの声が聞こえる。その声は明らかに向こうではニヤニヤとしているのが予想できるようだった。そのことに優理からピキッという何かの響いた音が聞こえたような気がしていた。

「……アンタ、ちょっと葵のことお願い。私はこいつをリスポでうずくまっでごめんなさい、もうしません許してくださいと言うまでボコボコに殺してやるから」

優理は息吹に託すようにして、モニターに修羅のような気持ちでダブルピースを睨んだ。

「ふ、お次は貴様だ。戦火の皇女とやらの実力、見せてもらおう」
ダブルピースは二丁拳銃を構える。それと対する優理のキャラ揚羽

も傍にあるウェスタン風の家の柱の陰に隠れながらM4A1を構えた。

まず動いたのは揚羽。彼女はまず銃のトリガーを引き、銃弾をダブルピースに浴びせようとしたが横に回転しながら、それを避けて揚羽のいる別の家の軒下にあったテールを倒して、それを盾にした。『やっぱりこんなのじゃやられないか、だったらここはいつもの…』

揚羽はM4A1に装備させたグレネードランチャーの部分に持ち手を変える。

「おっと、物陰に隠れたからって安心するのは早いぞ」

「なに!？」

ダブルピースはピースメーカーを構え、揚羽のいる方向とは少しズレた場所に撃ち込む。

『また…あの攻撃か!』

勘が働き、その場を離れるとガシツという木が鳴る音が聞こえた。さきほどまでいた木の柱を見ると、頭部分であった場所に弾丸の破片が突き刺さっている。

『跳弾を利用したヘッドショット!? なんてデタラメな弾道持ちよ。でもこれで!』

リボルバーなど、このゲームにおいて一発ごとの反動が大きいように設定されている。またダブルピースが持っているピースメーカーは撃鉄を一発ごとに引くという作業がある為、そのモーション追加による次の弾発射にはラグがある。揚羽そこを狙って、しゃがんだ状態でグレネードランチャーをダブルピースに向けて撃とうとしていたが――それより先に銃を構えていたのはダブルピースの先ほどまで撃つたのとは別片方のピースメーカーだった。

「残念だったな」

すでにその銃の撃鉄は引かれ次の弾の発射準備ができています。対する揚羽には相手が軒下とテーブルの間にある小さな的に当てるのは困難だった。

が、それはただの二流の一般プレイヤーのみが起こる困難である。

「それはこっちも同じよ！」

グレネードランチャーから加速のついたグレネードが飛び出すと同時にピースメーカーからの銃弾が放たれた。

「くっ……」

ピースメーカーの銃弾は揚羽に当たり、その場に倒れ込む。

が、ダブルピースも吹き飛んだかテーブルにもたれて倒れていた。

「やはり相撃ちか。やるねえ」

ピースメーカーは感心しながらリスポーンする為にキャラが消えた。それと同じに揚羽もリスポーンを行う。

「あいつ……相撃ちを狙っていた？」

どうも優理はその感心した態度と発言が少し気に入られない。

「感心するっていうのは自分の腕前が上っているからの目線よ。それにやはりってことはまるでわざと自分は手を抜いて相撃ちを狙わせたってこと？」

その行動から察するには優理はある考えに至る。

「こいつ、私を試してるわね」

しかし、それが一体何のためなのか目的もよく分からないままリスポーンから揚羽は動き出した。

『あいつは二丁拳銃を同時に使うことないってことね。ならたった2発を凌げればこちらに反撃の隙ができる。だったら……！』

優理はキーボードのファンクションキーを押すと、揚羽からfollow meという単語がゲームのメッセージに出る。これは命令

指示コマンドと呼び、これによって個人が一緒に戦っている仲間との連携が取れる仕組みとなっている。ボイスチャットは敵との距離が近いと向こうに聴かれるという弱点がある為、これがあれば内密に全員に指示が行き渡る。もちろんそれに従うかは個人の自由だ。

そのメッセージから二人の兵士が動き出した揚羽のキャラに付いてきた。

「よし、二人なら丁度いい！」

先ほどの場所まで行くと、やはりカウボーイ姿のおっさんが遠目でもわかるように立っていた。

「次は仲間連れか」

「あら、これはチーム戦よ。文句あるの？」

「ふっ、上等だ」

優理はとにかく仲間に来ていた二人を先にへと追いやるような形でダブルピースに近づく。

彼女が考えた作戦はごく単純でこの二人を肉盾にしてグレネードランチャーで共々吹き飛ばすというものだ。だが、そんなことは予測していたのかダブルピースは二丁拳銃の一丁をホルダーに納めた。

『や、やばい』

直観的にそれが分かったのか、揚羽はすぐそばにあったワラを積んでいる荷車の陰に隠れるとすんでの所で銃弾が飛び散ってきた。先ほどまで進んでいた仲間二人は頭を撃ち抜かれ、その場に倒れている。

「早撃ち乱射ってやつだ。これをするのとシリンダーの六発を全て撃ち出すことになるが……まあこの状況で使わない手はないだろう？」
早撃ち乱射とはこのゲームのある装備の一種で6発の一気に連射するという荒業的なものだ。だが、もちろんデメリットがあり、これをすればリボルバーというものにはリロードがいちいちシリンダー

に弾を詰めていく為、非常に時間のかかる作業だ。これをすれば大分の隙ができる。

『チャンスだ!』

この瞬間であれば残り一丁の銃を取り出すしかない。だが、彼のもう片方はホルダーに納めている。

優理はこの時がチャンスとばかりにグレネードランチャーを構え、撃ち出した。

「くらえ!」

だが、その間にダブルピースのニヤリと笑う顔が照準から覗き見えた。

「ヨミヨミだ。お前の動きはな」

弾が無くなった銃を地面に落として、彼はホルダーに納めていた銃を取り出し……そして、すぐその場から銃を撃ち放った。

その時、空中で爆発が起きる。

「な、なんなの!?!」

彼の放った弾丸がその飛来してくるグレネードを命中させた証拠だった。

「グレネードランチャーの弱点はな。弾の大きさゆえに弾速が遅くなる。オレみたいな輩には撃ち落とせるのよ」

『これが……賞金首^{バウンティ}稼ぎのトップの実力っていうの!?!』

彼のその実力を前にして、優理は戦意喪失する。だが、それと同じように彼も落胆していたように見えた。

「やれやれ……これがボスの目に止まるほどか。とんだ期待外れだ」
「ボス……?」

優理はそのボスの単語に引っかかる。彼はずっと単独で行動していたと聞いたが、そのボスということからまるで組織に入ってるよう

な言葉だった。

「ボスって……誰よ」

率直聞く優理であったが、簡単には口が割らないと思いあまりその答えには期待していなかった。

が、ダブルピースは口が開いた。

「克蘭——Gar^{ガルム}mリーダー。それがオレがボスと呼べるのはそのただ一人だ」

「が、ガルムって!？」

彼女も含め、全体のプレイヤーなら知らない人はいないという、その名。

克蘭にはランキングが存在し、その中でこのコマクロがサービスしてから絶対的に1位に輝き、その下の2位とは天と地のスコア差があるほどの実力者揃いの集^{克蘭}団がいた。

それがGar^{ガルム}mである。

『なぜ、ガルムのリーダーが私をお気に入りに？ 一体……いつから』

優理の腕には得体のしれぬ恐怖に鳥肌を立てていた。

#14 決死のグレネード

コマンダーオブクロスがサービス開始された当初、クランランキングにある上位はそのほとんどがFPSゲームが主流である海外勢が占めていた。もはや到底敵わないと言われた海外勢に突如として上位にあるクランが躍り出てきた。

それこそがガ^{ガルム}arm。

そして、その1年後に自ら上のクランに挑戦し続けた結果クランGar^{ガルム}mは世界1位という王者へと君臨した。

挑戦する側から挑戦される側になった王者は、ことごとくそれを斬り捨て、スコアポイントは1位と2位には天と地という差が開いていた。Gar^{ガルム}mは誰からも憧れの存在であり、優理にとってもそれはそうだった。

そのクランに所属していると思われる男が揚羽の目の前いるこのダブルピースだという。

揚羽は積まれた木箱に隠れながらグレネードランチャーの弾を装填して、道の真ん中でリボルバーを構えているダブルピースと話すことにした。

「あんた……そのボスに言われて私たちに会いに来たというの？」

「はっ、確かにボスには戦火の皇女、そして隻腕のナイフア^アーに接触しろと言われていたが……こう戦闘するまでは言われてねえな。だが、ボスもオレに行かせたわけだからこうなることは予測してただろうな」

「接触……簡単に言ってくれるわね。このゲームはフレンド登録しない限りチーム分けは完全にランダムよ。もしそれ以外でできるとするならば、私たちのログイン時間を知っていて、なおかつその戦^{ステ}い

場を知っていること……」

「さあな、オレはメールで指定された場所を行ったに過ぎねえ。詳しい事はオレにも分からね。さてと……そろそろしゃべり疲れたろ。殺し合いを……始めようじゃねえか！」

「くっ——！」

揚羽には必殺のグレネードランチャーという装備を持っているが、彼ダブルピースの前ではそれは弾速が遅く、撃ち落とされてしまう。それは持っているスタングレネードを投げたところで撃ち返されてしまうことも同意だろう。だが、ふつうに弾丸を放ったところで敵は簡単に避けられる。

しかし、ダブルピースのリボルバーにあるシリンダーの弾丸は残り5発で片方はもう弾は無いはずだった。少しの隙でもあれば、弾のリロード時間を与えてしまう。ならばここで弾5発を避けて至近距離で確実に仕留めるといった方法が唯一の敵を倒す方法。

『ずいぶん……無茶作戦考えたものだわ。ゲームじゃなかったら成り立たない作戦』

揚羽は一気に勝負を仕掛けようとダブルピースに突っ込む。

「なるほど……ここで好機と見たか！ 全力でそれにこたえてやろう！」

ダブルピースは片手でリボルバー銃を構え、こちらに撃ち込もうとしている。

と、そこで揚羽は腰からスタングレネードを持ち出して、ダブルピースへと投げた。

「考えたな！ だがオレの前ではそれは無意味だ！」

即座に反応し、そのスタングレネードをいともたやすく揚羽たちのいる後ろほうへと銃弾で弾き返された。

『残り4発！』

ここで揚羽はアサルトライフルで弾を数発撃ち込む。しかし、撃ち出された弾を難なくダブルピースは回避して反撃と一発の弾が放たれるが揚羽もこれを横に転んで回避するが、すでにリボルバーの照準は転んで伏せた状態の揚羽へと向けられていた。

『残り3……こっから正念場だ!』

揚羽はすぐに立ち上がって動き出すと、ダブルピースは弾を撃ち出す。

その弾丸は揚羽の左肩に命中していた。だが彼女は肩から血が出ることを気に病むことなく、そのまま止まらずに走る。そこをまたダブルピースは狙うが、彼女もそれは分かっていたか、ここでグレネードランチャーを撃ち出した。

「それは無駄だといっただろ!」

ポンツと軽い音共に撃ち出されたグレネードを撃ち、爆発させた。しかし、その爆風の中から揚羽は飛び出てきた。

「ちっ!」

真正面から突っ込んでくる彼女をダブルピースは頭に狙いをつけて放つが、そこで彼女は飛んだ。

弾丸は命中したが、それは右脚の部分。

「これでお前の弾は無くなった!」

現実だったら到底無茶な作戦。それはこのゲームが頭を撃たれなければ即死しないというものを利用したものだった。これで残り弾を使いきったダブルピースの攻撃手段は近距離となるナイフしか残っていない。だが、ナイフでは到底届くことない距離であり、リロードの時間はもうない。

勝負は決まった——かに見えた。

フツと鼻息で笑うような音が揚羽には聞こえた。

ダブルピースはそれまで撃っていたリボルバーを腰に納めて、もう一丁のリボルバーに手を添えた。

「隠し玉は最期まで残しておくもんだね」

すでにすべて放れていたリボルバーにはすでに1発の弾丸がシリンドーに装填されていた。

リボルバー形式のリロードは一発づつの弾を込めていくのですべての装填には時間がかかるが、一発程度ならどんな銃よりもリロードは早い。いつの間にか彼はリロードを行っていたのだった。

だが、優理もこの状況で引くわけにもいかず、マウスの右クリックを力強く押す。

いくら連射が強いアサルトライフルでも、すでに揚羽にはダメージをくらっており一発でも食らえば倒れる状況。確実に撃ち負ける。

『やっぱり……ガラムには敵わないの』

「優理！」

突如、横から優理に呼びかける声と共に揚羽とダブルピースの間を何かが横切った。

「……ふっ、オレももう一人がいたという存在忘れていたか」

ドサツとダブルピースは血を出して倒れた。しかし、揚羽のキャラは生きている。

そこで先ほど何が横切った正体を探るためにそれを確認すると、それには見覚えがあった。

「葵！」

ライオットシールドを持った優姉と表示されたキャラと共に、優理横のパソコンデスクで新笠葵が操作していた。

「だ、大丈夫なの。その……トラウマは」

「正直、怖いよ。でも優理撃たれるのがもっと怖かったから考えなしに突っ込んでたわ」

よく見ると、優姉とライオットシールドには一発の弾丸が突き刺さっていた。

「まさか……あの状況で横切りながらガードしたってこと？」

「ははは、ほんととどこで突っ込もうかとタイミング見計らっていたんだけど、優理があまりの熱くなってるから出ずらくてね。いやあ、最後まで見ていたらあんな状況でさ。で、操作が慣れてなくて、そのまま優理の前で止まらずに通り過ぎちゃったんだけど」

「横切りでよかったわね……あやうく私がフレンドリーファイアで、つまり味方に誤射するところだったわよ」

「えっ、そうなの？」

『天然だと……！？』

優理は葵のあまりの天然で奇跡的なガードを目の当たりにして頭痛がしてきた。

だが、葵がまた参戦するとなればこちらは有利な状況になる。

「まったく……隠し玉は残していたのはオレだけじゃなかったか……。さすがはボスのお気に入りということだけはある」

またリスポンして早々にダブルピースは戻ってきていた。

『いや、ほんと偶然なんだけど』

あえて優理は心の中でツツコミをし――

「ふっ、どんなもんよ」

と返した。

「だが、また盾のお嬢さんが相手となるなら、こちらにも常用手段を使わしてもらう」

ダブルピースは二丁のリボルバーを取り出して構えた。これは一丁は一直線にこちらに向けて放つものであり、もう一丁は跳弾を利用して攻撃してくるといふものだ。

「ど、どうする優理。さすがに跳弾なんかの攻撃は防御できそうにないよ」

「……向こうも二丁なら。こっちも二丁攻撃するしかないわね」

「は、は？」

「葵、玉入れの腕を見せてもらおうわよ」

優理は葵に作戦を伝え終える。

「む、無理だよ。それに向こうがこちらの動きバレたら……」

「大丈夫。私の陽動は完璧よ」

「作戦は終わりか……？　じゃあせいぜい楽しませてくれよ！」
ダブルピースは動き出そうとするが、その前にバツと揚羽が前へと走り出した。

「何を考えているかは知らないが……オレの視線をお前に集中する手だろう。だが、オレがそう簡単に引かかると思ったら……」

「やい、このアへ顔ダブルピース」

「……それを言うんじゃねえええええ！！！」

NGワードを突如いった優理は怒り狂ったダブルピースの標的へと簡単にされていた。

『奴が跳弾を仕掛けるとき、それは絶対に動くマトには命中できないこと。なら早々にこちらで動いていれば問題はない。だけど、こ

ちらも動きながらの射撃の命中精度じゃあ避けられる。それなら二人がかりで一人では走って陽動し、一人は銃を構えておくのがいいんじゃないけど……そんなことをしていたら止まっている後者はすぐに撃たれるわ。でも優姉のキャラはライオットシールドを持っていて、簡単には狙われないがこちらでも銃での攻撃はできない。そこまで考えて、相手はきつと葵には手出さずに私の揚羽のが危険因子となって標的を集中させるでしょうね。でも、それが残念な考え。葵が特殊なスキルを持っていれば、その状況は変わる』

揚羽は飛びながらM4A1のグレネードランチャーを構えて、標準をダブルピースへと向ける。

「だから、それは無駄だと言っただろ！ 何度も言わせるな！」
それでもグレネードは放たれ、それが彼に飛んでいくが、簡単に右手のリボルバーで撃ち落とされ、すぐに左手のリボルバーは揚羽を狙う。

「今度こそ、終わりだ！」

カラカラ……コロン。

突然、何かの物体が転がってきて、ダブルピースの足に当たった。

「ん？」

それを何か彼は確認する。

形は丸く。何やらレバーのようなものが付いた物体。

「し、しまった！」

彼がその正体がなんなのか分かり逃げ出そうとするが――

「もう遅い」

優理の冷たい一言の共にその物体は爆発した。

#14 決死のグレネード（後書き）

ちよつと落ち着きましたが、これから家の引っ越し準備が……ウボア。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400x/>

FPS少女と隻腕のナイフアー

2011年11月18日06時51分発行